或は具体的方法のみによりて心を豐富に充實せしむることも出來やう、又心の鍛練ここの具体的方法こを併用し得ることもあり、何れにしても、心が主でなければならず、益々外部の刺戟が甚しくなればなるだけ、心が身を統御して茲に確實なる健康體こなるに努めなければならぬ。要は心身の鍛練は健康保有の一大秘訣であるこいふまでだ。

▣濁れる水には月住まず、枯れたる木には鳥なし。……（松野殿女房御返事）〔清淨〕

朱に交れば赤くなるこ昔から惡友に交るなこ教へて居る。惡友は何日か知らぬ間に、我が身を次第々々こ惡くする者であることは云ふまでもない。所が人は惡るいこことでないこ思ひながら、何時か朱に交つて赤くなる樣に、知らぬ間に惡るくなつて居るのである。必ずしも惡友の爲のみではない。境遇もその一つ、時代もその一つであらう。其他色々のものが重なり重つて、貴い性善であ

るべき人を邪惡に引き入らしめて居るのである。そして人をして世の中は成程恁んなものかこ惡い方へ解釋せしめる樣に誘つて居る。何んでもお金のある人こ一緒に仕事をせねば身が浮かばないこか、前以てお鬢の塵でも拂つて置かねば高官は得て望む可らずこか、一文無しで商賣をするには出來る丈、借金をせねば駄目であるこか、余り書籍にも散見せぬ方法を講じて、盛に此に努力して居るのは事實である。俗に世渡りが上手こいふ言葉があるが、この言葉の中には、今日の學校教育の方針こ全然相反する事實や、又先哲高僧等が教へた遺訓こ全然正反對の事柄等が含まれて居るのである。そしてこれ等の事實が人生行路の最上の規矩こして尊重せられることが、孔孟の教よりも、基督や佛陀の教よりも、より以上に崇められて居るのである。一度眼を政治界の裏面に入れ、實業界の裏面に入れて、鋭く觀察すれば、そこに桑達の秘訣や利殖の捷經なこが、日月のそれよりも明に輝いて居るのが分るであらう。而して凡ての人が、

この方法に捕はれて盲動し屈從し自己を捨てゝ、その物に沒入することは恰も浮世を捨てゝ感念した老爺老婆が佛や神に沒頭するがやうである。何故他に自己修養、個性發展の方法もあるに拘はらず、斯くも、強いて所謂權謀を逞ふし、暗中飛躍を心見ねばならぬかと考へるに此が凡夫の淺間しい所である。唯一つに物質のみに自分の對象を求めて、自分を觀やうとする、云はゞ物そのものと自分との關係以外に生存の意義を求むることの出來ないものと思つて居る淺慮の然らしむる所である。彼等には神の心もない、佛の心も分らない、乃至宇宙全体の心も自然の歸趣する所も分らない。只現在の自分よりも、尙豐富に物質の優良なるものを得て、その中で自分を樂しまうとする外何等の目的もない。口にこそ日本の國体を稱へ、外國貿易なぞゝ云ふも、それは唯一つの看板と同樣で內實の深い自分の目的は優秀なる物質そのものの中に自分を求やうとするばかりである。恰も衣食住の只一方便を示せる道具に自分の精神を沒頭する閑

人の如く、茶器そのものの外自分なきが如き茶人の余生のやうに、或は美味なる食物によりて、無常の喜悅を感じて自分を食物によつて自覺するやうなものである。物質の存在は無限であらう。その無限なるを知つて有限なるものを獨占し或は有限なるものならしめやうとして滿足することが彼等の究極の物質に對する目的であらう。されば物質なるものを彼等より除き去れば如何に彼等は狼狽するか、如何に彼等は失望するか、蓋し天下痛快事は此より以上のものはなからう。何故に凡ての物質を自己の所有に歸せしめやうとするならば、人力を以て自然に抗し得らるるが如く、彼等は自然を破る力を以て、自然に介在し而して何時にても、有限たらしめ得る靈魂——精靈——宇宙の心——佛の心を自分のものたらしめ得ないのだらうか。そこには彼等の見得られないものがある。彼等が何うしても解し得ないものがあるのだ。而して絕ゑず物質の力に威赫せられて、その力に引き入れられて居るのであるから、物質に執着があり未

練があるので遂に物質から離れ難い人となつて、只現實の影のみ追ふ者となるのである。而して知らず〳〵に、所謂不正事を敢てする輩となり、遂に法律の制裁によつて所罪される身となるものもあるのである。是れ實に彼等の執着が根本となり、物質に對する未練が甚しいからである。一度自由にして自在に飛躍し得自己の精靈を向上せしめ、宇宙の本体――佛の心――神の心――と融合し得て、こゝに無限の自己の實在を認知し得ば、美しい天職に殉ずるが如く此を愛して勵み、天命を樂しみて何時も清淨なる神身たり得やう。この境介に存し得る人こそ、始めて清淨なりと云ふ事が出來るので、恰も澄みたる水に月が宿り、繁れる木に鳥が囀るが如く、佛の心は何時も清らかく胸の中に宿つて居るのである。

■女人となる事は物に隨うて物を隨る身なり。夫たのしくば妻も榮ふ可し。夫盗人ならば妻も盗人なる可し。是れ偏に今生の計り事にはあらず、世々生々に影と身と華と果と根と葉との如くにておはするぞかし。

……（兄弟鈔）〔貞操〕

イブセンの「人形の家」を見て急に新しくなつた近頃の美しくて新しい女達、感情だ氣分だと心持だと騒ぎ廻つて自覺の焔を燃しに燃されたこの頃の新しい女達は、何時までも男に服從すべきものでないと自覺するに至つたのである。旨從そのものを貞操の如くに敎へた今までの敎訓に破壞の斧を振つたのである。善惡如何を問はず、男の惡氷そのものに旨從して貞操だと云はれた昔の女を笑ひ、斯かるものに賞せられる女達を嘲つたのである。是れ確に女性の覺醒として古今未曾有であらう。而して此に附和雷同して若い女達は益々新舊思想の衝突を實演し、自らこの渦中に沒じて懊惱、煩悶して居るのは事實であらう。若し此等新しい女達が、然らば貞操とは如何の問題を解決するに至れば、貞操は知るの要なしと默して語らざるか乃至は我か要求を追行するが女の所謂貞操な

りこいふであらう。眼中既に男がない。眼中既に人がない。只眼中に存するのは自分の性慾を追究する對象物のみである。强いて彼等の要求を擧げば、物質それ以外に求むる所がないのである。四圍衣食住によつて自分を見出すに過ぎないのである。されば眼中男あつても自分のものにして了ふこし、凡ての物事を所有し抛棄するこのみを繰り返さうこするのである。併し、物質のみに自分を見出して靈魂に自分を見出さないのであるから、一度物質に欠くる所あれば遂には男の前にも盲從せざるを得ざるに至るのである。されば盲從から自覺へこ覺醒し得たりこなす新しい女は、未だ靈そのものに自分を見出し得ない以上は、茲に物質に掠はれて自覺した女なるに過ぎぬこ云つても宜からう。眞個の自覺した新しくて最も新しい女は靈そのものに自覺したものでなければならない筈である。云はゞ精靈に生きた女でなければならぬのである。私慾を捨てゝ忘我無我の境に自分を見出す女でなければならぬ。六ケ敷言へば宇宙の本躰

こ自己この渾一なる所に自己の偉大なるを自覺した女でなければならぬのである。所謂眞個の善を躰得したものでなければ本當に自覺した女こは云へぬのである。眞個の善を体得して始めて自分がある。自分があれば凡ての服從から脫し得やうこし、凡ての物事を自分のものこ爲さして了ふこするにも精靈の混一に物質も男も夫も抱合せしめねばならぬ。こゝに始めて美しい貞操が自然こ第三者の眼に映ずるのである。女は男に從ふべからざるこ昔から云ふのも、一つは女よりも男が余計に精靈を解し、眞個の善を体得し得る能力があるからではあるまいか。それをも考へず、只服從――屈從このみ知つて精靈――理性――解脫の關係をも知らず自覺々々こ稱するのは片腹痛い極みであらう。眞實精靈に自己を見出すこを得ずば須く、物質に掠れるにしても男の力によらねばならない。要するに自覺も只第一聲であつて眞底の意が表はれて居ない。居ない以上は昔のまゝの屈從に甘んずる方が寧ろ女らしいこいふまでゞある。

第八　時　時節　機會　惑世
執着　罪科　懺悔

■時鳥は春を送り、鷄鳥は曉を待つ。……（撰時抄）〔時〕

時鳥は晩春に鳴きて去り、鷄鳥は東天紅の頃を待つて鳴くことは皆人の知る所であらう。鳥さへも時を定めて鳴くのであるから、日蓮聖人は――畜生すら尙斯の如し。何況や佛法を修行せんに時を糾さるべしや――と諭さる。衆生を濟度する佛法を修むるにも時代や時節を知らねばならぬことを日蓮聖人は恁のやうに申されるのであるが苟も人を邪道より救つて正道に導き、濁世を矯めて淸らかなる太平の世に人を安めやうとするには、素より時代時節を知らねばならぬこと今更いふまでもない。佛敎に「機」を敎へ「時」を敎へるのも、無論この間の消息に通ぜしめやうとするからである。衆生を濟度する佛敎でも、人を

撫育薫育する敎育でも、誘導する的は全じであることもに、誘導するにも時代時節を知らねばならぬ。これは丁度時鳥の春を送り鷄鳥の曉を待つて鳴くやうであらねばならぬ。少年は少年らしく、青年は青年らしく撫育薫育せねばならぬこともその一つ、徒弟時代は徒弟時代らしく、學校時代は學校時代らしく敎育せねばならぬこともその一つ、訓諭すべき時には訓諭し、叱咤すべき時に叱咤するのもその一つである。然るに世には子弟の思想をも時代をも顧慮せずして、自分の經驗した古い事實に根基を据ゑて子弟の敎育に關與したり、又怒號叱咤すべからざる人前にて理性から遠つた人間の樣に只管自分の感情に趨られて罵詈するものがないではない。素より此等は人を敎へるに當を失したものではあるが、恁うした人達がこの末法の現代に相當の權威と勢力とを把持して居る以上は、如何に孔子の敎訓にしろ、耶蘇の敎訓にしろ、釋尊の敎訓が立派であつても、その効用は得て望まれやうもない。變轉限りないのは時の流れであ

る。この時の流れには、その時を代表する思潮こいふものがある。御即位ましした大正四年の秋には、その秋を代表した思潮――少年には少年の思潮――青年には青年、學生には學生、官吏、實業家、軍人、會社員等にはそれ〳〵の思潮がなければならぬ筈である。若し人を見て法を說くが如くその人〳〵に應じて敎を說くことが縱であるとすれば、時代を察しその人の時代思想を見て敎を說くことは橫であらねばならぬ。一は表で一は裏であらう。表裏縱橫はものの影であるからには、敎を說くにも、この表裏縱橫の如何を辨へねばなるまい。然るに此等の細密なる考案を回らさないで、範を古に執り、根基を古い自己の經驗にとりて、敎育施設を改造したり、昔なりの敎へ方に納まりかへるものが多いのである。されば茲に新舊思想の衝突――舊道德の沒落――自由思想の勃興し來るのも、時代時節を考察せず時代時節の思潮をも顧みない罪と云つて宜からう。日蓮聖人が佛敎の爲に時を說かるるのも、只佛敎の爲ばかりだと

見ては、そこに余りに早計の感がないではない。時の流れ――所謂ベルグソンの流れを尊重せられた所以であると吾々は首肯すると共に、釋尊の偉大なる敎訓に隨喜する間は、その効用に當を失しない覺悟――即ち時代を知るの要あることを深く心に銘せずばなるまい。

■四節四季取々に替れり、夏は熱く冬は冷く、春は花咲き秋は果なる。春は種子を下して秋は果を取るべし。秋種子を下して春果を取らんに、豈に取らるべけんや。極寒の時厚き衣は用なり。極熱の夏は何にかせん。涼風は夏の用なり。冬はなにかせん。佛法も亦復是の如し。

……（如說修行鈔）〔時節〕

人を敎ふるにも、佛法を說くにも、時節を克く心得て置かねばならぬことを申うされるのである。即ち衆生の機根が成熟して居るか否かを見て佛法を說かねばならぬことは、丁度、少青年の如何に依つて、仝じ科學でも、その精粗を

異にして教へねばならぬのと仝じである。日蓮聖人は釋尊一代の諸經に就いて――小乘流布して得益あるべき時もあり。權大乘流布して得益あるべき時も有實教流布して佛果を得可き時もあり。然るに正像二千年は小乘權大乘流布の時也。末法の始めの五百年には純圓一實の法華經廣宣流布の時なり。――こいはれて居る。小乘經とは佛教教理の初歩にして釋尊の第一歩に說かれたるもの、權大乘經とは法華經以外の大乘經(即ち深遠なる教理を說ける諸乘經)をいふ。純圓一實とは小乘でない大乘で、而かも權教でない實教をいふのである。今や純圓一實の法華經を廣く流布せなければならぬと自覺されて、聖人は――雞の曉に鳴くは用なり。宵に鳴くは物怪なり。權實(權教實教)雜亂の時法華經の御敵を責めず、山林に閉ぢ籠り攝受を修行せんは、豈に法華經修行の時を失ふべき物怪にあらずや――と申されて居るのである。時を知る、時節を確知することは凡そ人に物を教へ、人を諭して向上せしめやうとする者の第一

に心得ねばならぬことであらう。然るに時を思はず、時節を確知せず、丁度秋種子を下ろして春に果を得やうとしたり、極暑に厚き衣を強いて着せたがるやうに人を教へ人を諭して居るものがある。日蓮聖人御在世當時はさて置き、大正の現代に於て、やたらに詰め込み、無暗に注入する教育法が未に影を沒せずして居るものがある。のそり〳〵と修め悠々として學に附き教を受ける獨逸青年の根氣が、如何にすれば、斯くも天下泰平に職業を重じ、自己の生命を愛し、自己の天分を發揮せしむるかを研むることをせないで、これも、あれもと注入して青年の根氣を一陣の風に枯らしむるがやうに、傾注して居る教育家がある。これは要する少青年の時節を眞實に理解しないからであらう。一方重荷の如き教育法を講じて、他方青年に向つて忍耐なれ、克己なれと強うるは丁度極寒に涼風を送くりて辛棒せよと強うるがやうではあるまいか。青年といふ時期は發育一方の時である。未だ成熟し切つたる身体をも有せざれば思想だに有

して居ないのである。さればこの重荷に耐ねずして身を害し、精神を損ねて居るものが澤山出來て居るのである。成熟の曉は、よし、如何なる重荷を強ふるとも、平然たり得やうが、未熟の稻を直に鍋に入れて、成熟せる米仝樣にその効果を望まうとするのは、望むものゝ罪である。見れば神經衰弱症に罹れる幾多の少青年が居るではないか。如何にして此等を救はんかと思ふときは、時を知り時節を辨ふ佛法の如かるべきに着眼して猛省するより途はなからう。

■月は妙じけれども秋にあらざれば光を惜しむ。花は目出けれども春にあらざれば咲かず。……（妙密上人御消息）〔機會〕

天の與ふる機會に乘ぜよ見逃す可らず――こシエクスピアは云た。機會は即ち時機である。時を知らず機を知らずして人を敎ふるも愚の一つであれば、機會を看過して此に乘じ得ざるも愚の一つである。月は秋に至ればその美妙なる光を稱られ、草花樹石春に至りて始てその趣を見ることが出來るのは皆人の知

る所である。草木にしても丁度春を待つが如く冷かき月にしても秋を待つて自分の光を表はすやうではないか。自分を赤裸々に表はすことが兎角今の若い人達に歡迎せらるゝ今日でも多少時を待たねばなるまいかと思ふのである。その時その時の氣分に自分そのものゝありのまゝを表はすことは事實を尊重する點に於ては決して時を待つ必要もなからうが、それで以て共鳴を他に求むるには時を待たねばならぬと思はれる。嚴格にいふと共鳴を他の人に見出すことはよほど自分とその人との心持が密接して居らねばならぬ時であつて、この時を外づしては、またと得られぬものである。共鳴を得るにしても既にその人のもたらし來る時を待たねば出來ないのであるから、まして人を敎へ誘くに於ては機と時とに依らねばならぬのである。馬の耳に念佛のたとへと仝じく敎へられる者が知らぬ顏の半兵衞ではいくら敎へやうとしてもその効果は望み得られぬ。その人の心持が、そのものに向ふて來た時に、そのものを敎へてこそ始めて人

の心の中に効果が鋭く刻みつけられるのである。また教へられる者にしても、譬へ自分が努力の効果を切實に望むで居ると云つても、朝から晩まで絶ゑず經續して居ては却つて努力して効果の万分の一も出來ず所謂働き損のくたびれ儲となるものである。柿の木が熟して甘味となつた時に此を食してその美味を稱へると全じやうに、修德勤勉努力の機が熟し來る時に渾身の勇氣と忍耐とを提げ此に當れば、尙より以上の効果が求め得られるのである。釋尊は一生を投じて機會を得やうと努力せられた。七十二の御歳までは機熟せずと見られて「法華經」を說かれなかつたのであつた。一度機の熟して此に至ると知られたその曉には堂々と世界十方の依るべき眞理を發表せられたのである。日蓮聖人、時即ち時機——即ち機會を尊重して万事を處すべしと云はるゝこの句は近頃の若い人達にも有掌の暗示となるであらう。まして道を講ずる幾多の教育家の訓示としては蓋しこれ以上のものはなからうと思はれる。

■此頃は女は尼に成りて人をばかしるなり。努力有るべからぬ事なり。……（四條金吾釋迦佛供養事）〔惑世〕

男は入道に成りて大惡を造戀に破れて尼となる女もある。喰ふに困つて遂に坊主となる男もある。一は同情すべく一は悲しむべきものであらう。併し破れた戀の心から男を愚弄する女よりも、漢搔きに漢搔いて罪科を敢てする男よりもその罪は少なくて寧ろ愛すべき心掛けであらねばならぬ。釋尊一代カ時の御教が何處となく尊くして人知れず襟を正さしめ、朗らかに讀める御法の聲が廣い堂宇に滿つれば、やがて佛のましました如く人知れずに我を忘れて佛の御手を確と握り、清かな國へと行くがやうに思ふのは誰しも經驗する所であらう。この經驗から破れた戀を御佛の力によりて慰さんとする女、困り拔いた心を洗はんとする男は同情すべくして愛すべき心掛けであらう。既に人に斯ゝる男女を觀るに同情と畏愛とがある。寧ろ凡ての尼を見るに、凡ての僧侶を見るに、浮世の執着を捨てゝ清かな生涯

に入り、時としては人生を濟度する神々しい男女と觀るのである。然るに尼の物質に掠はれ性慾にそそられ、坊主の權勢に迷ひ名利に隨喜する等は、既に棄てたものを更に拾つて自分のものとする者、否寧ろ棄てたることを悔みて拾ふと希ふ者である。浮世の人は尼僧等には多大の尊敬と同情とがある。此の尊敬と同情とによりて、更に執着に蘇らうとするのは、羊頭を掲げて狗肉を賣る俗惡の商人と同樣である。而かも尊敬といひ、同情といふ人の美德を利用して五慾の敎ふるまゝに振り舞ふことは言語道斷の沙汰と云つてよからう。然るに、尙この人々の美德となす尊敬と同情とを飽くまで利用して、此等の人々の常識に於てだに爲し難き大罪を敢てするなどは彼の世を惑亂する許す可らざる重罪犯人の罪科よりも重からねばならぬのである。僧侶の罪惡は世を亂すこと甚しい事は今更いふまでもない事であるが、聖人此れを誡めらるゝ御言葉として――ゆめ〳〵有るべからぬ事なり――と申されるのは鎌倉當時の僧侶等を誡し

められる御言葉であつても、ナ正の現代にも活用して俗惡に流れんとする凡ての僧侶尼僧共を寒からしめるであらう。世は益々生存の爲に混惑せんとする繁鎖なる現代に於て、凡ての俗惡惡流と其の軌を一にして世を惑亂せんとする僧侶尼僧のあるを聞けば、吾々は何處までも制裁し、或は筆誅し、打擲し、聖人の所謂刀杖を加へねばならないであらう。

■曲れる木は直なる繩をにくみ、僞れる者は正しき政をば心に合はず思ふなり。

……（新池殿御消息　〔執着〕

平田篤胤の歌に――これはしも人にやあると、よく見れば、あらぬ獸の人の皮着る――といふのがある。人何を好んで獸の皮を着るものがあらうぞ。誰れが獸の皮を着てよろこぶものがあらうか。寒苦に堪へやらぬものは色々と獸の皮を着るだらうか、心まで獸になつて居るものはあるまい。人の心と獸の心と何れだけの差異があるだらうかと一度熟慮すれば、そこに懸隔の甚しいの

に驚くであらう。性慾そのものに泥む心と、性慾を全然隔離し得る心との差である。性慾それ以外に得るものなきとする心と、性慾以外に何か求むることの心との異ひである。而して性慾以外に何をか求め、性慾を全然隔離し得て、尙且生息し得る事實が人間にあるのだ。名僧が斷食して悟道した事も見たれば聽きもした。禪機三昧に入つて人事――社會――自己を打ち忘れ、性慾をも更に追はぬやうになつた人もあつた。果して犬も猫も數日食せず、一日數時間靜座して何にもかも打ち忘れ得ることが出來るであらうか。自己を追つて自己の影に泥みたがるのは、餌を求めて食の影に泥む雞ばかりでなく、食を追ふ犬猫ばかりでなく、皆な人の常であらう。見よ、性慾の充實に努力する遊冶郎、金の色に我が身を沒して金を追ふ者、或は名權に自分を沒入して、その影を追ふ爲政者、皆此れ等犬猫と同類である。只生んばかりでなくて、より以上に性慾の充實を望むこと丁度、性慾の影を追ひて食を求むる彼の禽獸等と全じである。

されば性慾を制せんとする心から、言ふ言葉、行ふ行爲等は丁度彼等には曲れる木の直なる繩を望まざるが如く、僞れる者の正しき政をばにくむがやうに嫌ふのである。素より性慾に泥むはあさはかなる五欲の導きではあらうが、執着に執着し切つた心は悲しむべきものであらう。執着とは心のとらはれをいふのである。心がとらはるれば、茲に脫が生れる。執着とは心のとらはれをいふのである。心がとらはるれば、茲に自分といふものが活かなくなる。何故自分といふものを固く作り上げて、五慾に捕はれんとする自分の心を自由自在に御して行かぬのであらうかと、僞れる政に泥める者多くあるを聽き、隘惑せる文字に執着して自分を知らざる文士の多くあるを見て等しくこの感を深くするであらう。日蓮聖人、濁世を御覽ぜられて、斯く申される御言葉は、取つて以て今日の誡として、此を世に問ふのである。

■女人よりも男子は禍多く、男子よりも尼の禍は重し、尼よりも

僧の失は重し、持戒よりも智者の科重かる可し。……（妙法曼陀羅供養事）〔罪科〕

人には過失がある。然し過失あるを知つて悔悟すればその罪輕いものとなる。燃るに悔悟せずして、益々この過を行ふとする者がある。此れを行へば、善くないと知りつゝ行ふ者が世間には克くあるのである。斯ゝる者の罪は、一度過つて犯した者の罪よりも重かるべきものであらう。所謂前科者とは恁ういふ者を指すのであるが、これは女よりも男の方が多いと今でも統計學者は云つて居る。併しこれ等は皆凡夫の淺間しさが何時か知らぬ間に犯罪を犯さしむるのであるから、五慾に迷ひ勝ちな點では、さもあることかも知れぬが、一度五慾になづまずと誓ふた尼僧が五慾に導かるゝに至つては決して許し得べき罪ではないのである。尚女性よりも意志强固にして持戒に富める僧坊が、凡夫が罪なりと怖れる罪科を敢てすることは素より寛恕すべきものでない。況して一世を

指導し指示する智者が斯ゝる罪を犯したとすれば、是れ實に言語道斷の話で一日も彼の存在を許すべきものでないのである。見よ、一世を指導し誘導せんとする智者、佛の慈悲を普く凡夫の心に植ゑんとする坊主、五慾を斷つて龍女の成佛を習はんとする尼僧等が收賄し贈賄し惑溺し墮落して居ないだらうかと現世を見るのだ。日々新紙の傳へるものは何を傳へて居るだらうか。事實を報道するばかりで滿足して居ないのにも徵して明かではないか。凡夫、五慾に導かれて罪を侵す勿れといふ僧坊尼僧。人、正義に依つて正道を濶步せよと敎ゆる智者が既に罪科を敢てしたりと聞けば吾々は何を以て釋尊の敎訓に報ゆることが出來やうか。單に記されたるこの名訓は、今の濁世を誡しめるに蓋し恰好のものとして吾人は拜誦するのである。

■淺き罪ならば我より許して功德を得さすべし。重きあやまちならば信心を勵まして消滅さすべし。……（阿佛房尼御前御返事）〔懺悔〕

孔子は――過は改むるに憚るなかれ――と云つた。釋尊は――人多くの過あるのに、自ら悔みて、頓にその心を息めなかつたならば、罪が來て身を苦しめること、丁度水の海に次第々々と深く廣くなるがやうである。人過ちがあれば克くその非なるを知り、悪を改めて善を行ふならば、罪が次第になくなつて行くのは丁度病が汁を得て治るがやうである。――と云はれて居る。今の世に日蓮聖人のやうな信仰の深い自信に富んだ名僧があれば、誰れしも、改悟解脱の方法を尋ね求むるかも知れぬ。又、このやうな名僧はつとめて懺悔改悛の道を授けられるに違いないのだ。恁ういふ氣高い名僧先師に導れて悔悟懺悔し得る者は幸福であらう。併しまた、仮令師がなくとも、自ら悟りて正善の露に浴し得る人も幸福である。然るに此に反して、名僧智識の御言葉をも聽かず、又自らも悟り得ずして、煩悶懊惱の絶ゑ間なく、非業惡緣に苦しめる人は、何を措いても、不幸の人といはなければならぬ。懺悔は信仰に入る第一の門である。

罪の淺深如何を問はず、懺悔改悟の影には、新しい光が輝くのである。この新しい光は人を正に歸し、道を與へて、德を備はしめ、正善に入らしめて、佛の心と合一することに力あるものである。人もと性善である。他人の惱める姿を見れば、憫を垂れたがるものである。他人の惡に泥める行を見れば、悲しみを誘ふものである。而して人は世の心と共に推移して、自分の最善を盡くさうとするものである。この最善を盡さんとして凡ての人はその門で迷ふのである。この最善の門に至つて、我を見ないで走らうとする。そして罪業を起して此を隱さうとするのである。隱さうとすれば益罪業が增すばかりである。何うして改悟して素の性善に返らないのであらうかと自ら考へても見ないで居る。凡ての罪惡は恁うしたことから經驗せられるのは、免囚人が尙罪科に自分の影を追ふがやうである。罪惡は罪惡ではあるが、人に罪あるのではない以上、罪をにくんで人を憎まざるほど、人の性善なる以上は、茲に罪科ありと知れば、須

く悔悟するの眼がなければなるまい。懺悔は信仰の門に入るの第一歩と共に、凡ての悪業を捨つる心の一大動機となるものである。懺悔なくして人格の尊重徳の深淺は論じ得られやうもなければ、過失あるが人の常なれば、一つの懺悔は百の人格を作り、千の徳を備はしむるであらう。

第九　釋尊　聖賢　先哲　賢愚　君子小人
佛と宇宙　恩　光明　凡夫と慾
佛の恩　四恩四德

日本國の天神地神九十餘代の國主并に萬民牛馬、生とし生ける生ある者は皆教主釋尊の一子なり。……（妙法比丘尼御返事）〔釋尊〕

この御言葉は釋尊の偉大なる所以を申されたまでに過ぎぬのである。聖人が——又日本國の天神地神諸生萬民等の、天地、水火、父母、主君、男女、妻子、黑白等を辨へ給ふは、皆教主釋尊御教の師也——と述べられた言葉に徵して明かである。何故そんなに釋尊が偉大であるかと今更しくいふまでもなからう。然るに一知半解の眼を以て釋尊を論じ、否全然釋尊を知らないで（只名を聽くばかしで）居るものが世の中に多いのである。個人的には智の絶對境、德の絶

對境に入りて宇宙乾坤の歸一する所を握り、眞善美の究極する所を掴みて人の行くべき道を指し示し、社會的には社會民衆の據るべき法を以て、社會廻轉の油と爲し、一つの理想境を樹てゝ此に至るの道を開きて社會廻轉の車を容易く引き入らしめるやうに磨き且固められたのである。天台大師が――秘密とは一身即三身なるを名けて秘と爲し。三身即一身なるを名けて密と爲す、又昔の說かざる所なるを名けて秘となし、唯、佛のみ自ら知るを名けて密と爲す、神通の力とは三身の用なり。神は是れ天然不動の理にして即ち法性身なり。通は是れ無窒不思議の慧にして即ち報身なり。力は乾用自在にして即ち應身なり。佛、三世に於いて等しく三身あり、諸敎の中に於て、之を秘して傳へず――と申さる。釋尊はこの三身をそなへたまふが故に偉大である。即ち絕對智に入り給へる法身――眞善美の究極する所を掴み給へる報身――出でゝは社會の轉る可き道を示され、入つては人の履むべき道を示さる應用自在に處理し給ふ應身――

をかね備へられるのである。カントが喧しく稱へた認識論や、ゼエームスが述べた實用主義も、ベルグソンが主唱した流れも、既に釋尊は知つて居られるのである。耶蘇、孔子の聖人が說いて人を諭すことも、總ての科學者が分析し解剖し歸納して眞なり善なり美なるものを究めんとすることをも知つて居られるのである。されば信仰に入るにも、又身を處するにも、吾等が父であると同時に、智を求めて已まない吾等が新し心の親であるのだ。親なき子は育ち難く、吾等が心に釋尊の光が照らさずば、吾等が歸依し信賴するに道はなく、理想の理想の最大理想に到着して自分を樹立することも出來ないであらう。釋尊の御敎、夢疎にすることの出來ないのはいはずもである。

◎凡夫の習い身の上ははからひがたし、是れ能々知を賢人聖人とは申すなり。

……（四條金吾殿御返事）〔聖賢〕

何うして宜いか分らずに將來の道に迷ふて居るものがある。恁うもしたいと

思ふて、その通りにならずに煩悶して居るものがある。世間の人皆それである。浮世はまゝにならぬといふのも、一つは此等の人が一大光明を認めず、一大自覺に眼を据ゑ置かずして、その時〳〵の氣分心持にて、其の時の心の影を追ふからではあるまいか。一寸先は闇の世の中、今死ねば明日朝起きて、旨い味噌汁も吸へぬ果ない人の身の上、執著が固つて、只現在ばかしに生きやうとしてあせるのも無理はない。そして現在の結果を以て將來を押し通さうとして居るのであるが、何時も押し通し得られずに懊惱して居るのである。云はゞ現在の影が將來に及ぼす形を握らうとするもので、其の間何等の統一もなければ、秩序もない。されば一度一大災厄乃至一大不幸失敗に遭遇すれば、何うして宜いかと將來の道に迷ふのである。是れ聖人の申うされる所謂凡夫の習ひである。然るに賢人聖人は、現在の波動に漂はず、過去、現在、未來と一貫したる道に處して、德をゝみ、絕ゑず和善の努力が胸中に燃燒しつゝあれば、金力を以て

しても自由ならず、權力を以てしても左右せられず、假令大災難に遭遇すると、泰然自若として處決するの果斷に富んで居るので、出でゝは一歩も將來の杞憂もなく、退いては、一歩も現世に執着もない。而して自然の教ふる人の道を靜に、ゆる〳〵と歩みて、德を自ら体現しつゝ、人生最高の善の境介に何時も沒入して居るのである。日蓮聖人、斯ゝる自分を知り、人を知り、天地を知り、自然を眞實に理解するを賢人聖人と申すなりと申されるのであるが、現代人は此れ丈に理解し得られやうか否、又現代にかゝる聖人賢人が居るか否やと、濁世益々濁世たらんとするに當りては、吾々は眼を瞋らして探らねばなるまい。富豪必ずしも、一代の聖賢ではないぞ、大臣知事必ずしも一代の聖賢ではない。彼等は只金を作るの器械に止まり、國政を料理する點に於て偉大なりとするも、世道人心の歸趣に就いては、素より知り得べき筈もなければ、彼等を以てその道の人となすは考へものであらねばならぬ。若しそれ、世道人心を啓發し、誘

導するこを眞實の目的とする無冠の宰相たるものが新聞雜誌記者乃至學者宗教家、教育家だとすれば、惡世末法に汚れては已まぬ現代を如何に改造せねばならぬかと吾々は共に講究せねばならないであらう。

■人路をつくる路に迷ふ者あり、作る者の罪となるべしや。良醫藥を病人に與ふ、病人嫌ひて服せずして死せば、良醫の失となるか。

……（撰時鈔）〔先哲〕

一言に約して言へば、先哲知名大家の言を克く聽け――釋尊の申される御言葉を能く聽け――と日蓮聖人は申されるのである。經驗は積んで學となり教となる。カントの哲學でも、論孟の教でも、詮ずる所は自分の經驗の集積か、又は人が經驗を組織して學問となしたものに、自分の經驗の加味壉梅されたものの集積である。釋尊の教にしても、釋尊御自身の難行苦行から大悟撤底せらるるに至るまでの御經驗の凝結であるこは誰しも辭み得まない所であらう。此

處で吾々は考へねばならぬ。少くとも一世一代の教主と尊重し尙後世末代までも、萬古不易の教を垂れられた先哲としては、吾々は世界三聖の釋尊、孔子、耶蘇に指を屈するであらう。虎は死して皮を殘し人は死して名を殘すにしても、幾千年までも斯く動かざること泰山の如き幾多の教訓を殘されたこの世界三聖の御經驗には吾々が低頭謹聽すべき幾多の人の道、幾何の難病を治療する良藥を生み出されたであらうかは想像するにも餘りある事であらう。今日吾々が教訓として朝夕に誦して自分を省る金言は、そこに尊敬すべき三聖の御經驗の賜であること勿論である。即ち後世の吾々人間に幸あれと願はれた世界三聖の慈悲、仁愛、は吾々が處世の道であり浮世の良藥である。云はゞこの處世の道なり、浮世の良藥なるものを造らんが爲に、世界三聖はいかほどに心を勞せられ難行苦行せられたであらうか、試に想像して見るも宜いのである。然るにこの三聖の苦行難行の昔を思はず、徒に自我を振り廻す若い人達が隨分ないでもな

い。ニイチエが何うの、イブセンが何うのと騒ぎ廻つたり、「人形の家」のノラが何うの「故郷」が何うのと喧しく嬉しがる女も居る。自分自を稱して「新しい人」と喜んで居手合もある。併し此等の新しがる人達は、眞實にニイチエなりイブセンやトルストイ等の敎へを理解して居るだらうか何うかは甚だ怪しいのである。表に人道を裝つて裏に權謀を恣にした事實を觀、此を唯一の處世の道と心得た人々を觀て、イブセンは問題劇を提供したのではあるまいか。人生窮極の目的を探らうとした眞面目の心が世の風潮に望めば望むほど遂に惡風潮を罵詈せざるを得ざるに至つたのはかのトルストイではあるまいか。中庸に「天の命をこれ性と謂ひ、性に率ふをこれ道と謂ひ、道を修むるをこれ敎と謂ふ」とあるがやうにイブセンにしろ、トルストイやニイチエにしろ、天の命に率つて道を求めたのでなからうか。「山水の其の源を清めてぞ、千々の流も濁らざりける」と藤原の親衣が歌つたやうに人は性善であらねばならぬものである。

この根本義を忘れ、ニイチエやトルストイ等のいふ根本をも深く探らないで、自分達の氣隨氣儘に都合の克い所ばかしを、唯一の眞理と心得て騒ぎ廻る近頃の新しい人達は、丁度、人の作つた路に迷ふ者、良藥を嫌つて服せざる者であらう。眞理は容易に獲得し難いものである。此れには釋尊にしろ、耶蘇にしろ、孔子にしろ、殆んど一生を投じて居られるのであるから、一二文豪思想家が眞理の探究に苦惱しつゝある一事項が、即ち眞理なりと早合點する新しい人達は素より早合點するだけ、それ丈淺學韮才を表し、苦行難行の修行の足らぬものであると心得て宜からう。かさねて茲に云つて置く。自我なり主我なりを主張する前には、少くとも佛陀の一切經を讀破してからでなければ本當でなく、流轉だと云つたヘルグソンの哲學を學ぶにしても、釋尊の敎義を縱なり横にも見て、深く味つてからでなければ、眞實に理解されて居ないと云つて宜からう。一口に道と云つても、そこに深さや廣さがある。良藥と云つても、それには種

々色々あるであらう。何れを求めてよいかは、性に率ふをこれ道なりといふ言葉に思ひ合して判斷するが宜からう。

■金は大火にも燒けず、大水にも漂はず朽ちず、鐵は水火共に堪わず、賢人は金の如く、愚人は鐵のごとし。……（生死一大事血脈鈔）〔賢愚〕

熊澤蕃山は恁ういふ事を云つた。――君子の意志は内に向ふ。已獨り知る所を愼むで、人に知られんことを求めず、天地神明こまじはる。其の人がら光風霽月の如し。――こ。光風霽月たり得る所の人は所謂、君子、賢人である。弱き者を憐んで、強きものを怖れざること、丁度黄金の大火に怖れず、燒けざるがやうであらう。而して、強きものゝ壓迫、屈伏にも、ひるまずして弱き者を救ふのは、恰も大水にも漂はず、朽ちざる黄金のやうである。黄金は何時までも、其の眞價を發輝して天下の諸金に王たるに耻ぢざるが如く、賢人も、強迫、

迫害、誘惑、等に誘はれて凡夫のやうに人格を無下にせないで、終始一貫、正道を濶歩し、死しては末代までも、其の眞價を世に唱れて、人に畏仰せらるゝものである。平素、何等の名譽、榮達の野心なく、人の道を行ひて德こし、我が生命を愛するこ共に人の生命を憐み、悠々こして正業を樂しんで勵む人である。若し、權威者の來りて強ひて邪道に人を誘かば、寢むれる獅子か猛然こして努號するが如く、その屈從に應ぜざる者である。而して、只人の履むべき道を、靜に歩ゆみ、靜に行ふ事を愛し、樂しむことは、十年一日のやうである。春來りて花が咲けば笑ひ、夏來りて人苦しめば憐み、秋來りて鳥鳴けば人こ共に喜び、冬來りて人威ろゝに至らば慰め、雪の朝、月の夕、行くこして心勝れやかならぬここなく、恰も小兒が世を樂しむが如く此を樂しみ、餘裕綽々こして心中常に光風霽月に接するが如く、天命を樂しむものである。されば其の行、清く、其の德高くして末代にも及び、後世の摸範こなり得るのである。此に反

して小人、愚人は利害にのみ齷齪として、胸中餘裕なく、名聞にのみ身命を腐らして心中閑日月なく、命を惜しみ業を厭ひて、人の榮達に氣を揉み、行くとして絶えず動搖しつゝ恒に暗雲にさざされ勝のものである。一度水火の大厄に遭遇せば迷夢にさざされて行く所を知らず、恰も鉄の赤く鑄びて、朽ち果つるがやうに喪心自失して自滅して了ふのである。素より賢人愚人の差異は同日の談にあらずと云つても、その履む一歩の足の前に横はれる道によりて、この相違を來たすのであらう。聖人訓諭せられて第一歩を正しきに執れと暗に申される。賢愚の差異、吾人の第一歩に依るとすれば吾々の一歩は意味深刻なものでなければならぬものである。

■世には賢き人は少く愚なき者は多し。牛馬の父を知らず、兎羊の母を辨へざるが如し。……（九郎太郎殿御返事）〔君子小人〕

世の中の人に褒められ、怨やまれるには金持に限る。美人に惚れられやうと

すれば俳優に限る。學者や僧侶は何方かと云へば、餘り好まれないのは當世のならひであらう。否、幾時代を通じても、恁うしたやうに、名僧智識には嫌忌の情を以て迎へられるやうである。由來清くして美しき教を垂れ、世道人心の爲に碎身粉骨する人は、世からにくまれるには、古今東西皆その軌を一にして居る。釋尊は云はずもあれ、法然上人の如きも親鸞上人の如きも、又日蓮聖人でもその通りである。一度理性の冷かきに我身を据き、靜に人生の歸趣を探ね、古今の事蹟にそれを照して、思ひを釋尊の實教に寄せ、我れと觀じて我が心の落ち行く先を考へなば、それ等高僧智識や偉業を建てた人々の凡ならざるに驚くであらう。然かるに一時一時の感情に抱泥して、眞實申されたる言葉を味はず、徒に誹謗し罵詈し去らんとするには一は識のなく、學もなき罪とは云ふものゝ、凡ての人の執る道のやうである。そも〳〵賢い人とは如何なる人か、愚なる者とは如何なるものかと云ふに、一は五慾を是認し此を輕視して人生最高

の善を行はんとする人、一は五慾そのものに人生を托して人生の歸趣をも、わが天分をも天職をも知らざるものをいふのである。旨千人といふ諺も、云はゞこの愚人をさしたもので、仮令眼に一丁字はなくても人の履むべき道を履み得ず、事實が教ゆる幾多の教訓に接しながら、此を行ひ得ずして、只喰ふて寢て暮すことのみを知るものをいふのである。此れは古今東西ともに仝じく社會の大半以上を示めて居るものであるが、眞個の文明は要するに、此等愚人を醒さすものでなければならぬのである。必ずしも電車や飛行機のみの發見や此等の恩澤に浴することばかりでないのである。

■虎嘯けば大風吹く、龍吟すれば雲おこる。野蒐のうそぶき、驢馬のいはうるに風吹かず、雲おこることなし。……（上野殿御返事）〔佛と宇宙〕

恁ういふ事は事實あり得べからずと云つて今の人は信じないであらう。虎嘯

いて大風の起つたことを見たこともなければ、龍なんて此の世にある筈がないと云ふであらう。眼で見て信ずることが、一面究極の智識を二分して了ふやうである。一つは自己と共に知る智識と、他は自己を離して知る智識とである。而して今の人――殊に科學的智識の發達した人は、自己を離して物を知り物を信じやうとする傾があるのであるから、信仰と云へばてんで頭の中に入らないのである。世に神なんてあるものかとか、佛に人間か成る、そんな馬鹿氣た事があるかと云つて、自分の智識の至らないのに氣が附かないで、納まり返つて居るのである。恁ういふ人々の爲に左に西田博士の說を見せて置く。――宗教とは神と人との關係である。神とは種々の考へ方もあるであらうが、之を宇宙の根本と見て置くのが最も適當であらうと思ふ。而して人とは我々の個人的意識をさすのである。此両者の關係の考へ方に由つて種々の宗教が定つてくるのである。然らばいかなる關係が眞の宗教的關係であらうか。若し神と我と

は其根底に於て本質を異にし、神は單に人間以上の偉大なる力といふ如き者と
するならば、我々は之に向つて毫も宗　教的動機を見出すことは出來ぬ。或は
之を恐れて、その命に從ふこともあらう。或は之に媚びて福利を求めることも
あらう。併し、そは皆利己心より出づるにすぎない、本質を異にせる者の相互
の關係は利己心の外に成り立つことは出來ないのである。ロバルトソン、スミ
スも、宗　教は不可知的力を恐れるより起るのではない。己と血族の關係ある
神を敬愛するより起るのである。又宗　教は個人が超自然力に對する隨意的關
係ではなくして、一社會の各員がその社會の安寧秩序を維持する力に對する共
同的關係であると云つて居る、凡ての宗　教の本には神人同性の關係がなけれ
ばならぬ。即ち父子の關係がなければならぬ。併し、單に神と人と利害を同う
し、神は我等を助け我等を保護するといふのでは、未だ眞の宗　教ではない。
神は宇宙の根本であつて兼ねて我等の根本でなければならぬ。我等が神に歸す

るのは其本に歸するのである。又神は萬物の目的であつて即ち又人間の目的で
なければならぬ。人は神に於て己が眞の目的を見出すのである。手足が人の物
なるが如く、人は神の物である。我々が神に歸するのは一方より見れば己を失
ふやうではあるが、一方より見れば己を得る所以である。基督がその生命を得
る者は之を失ひ我が爲に生命を失ふ者は之を得べしといはれたのが宗　教の最
も醇なる者である。眞の宗　教に於ける神人の關係は必ず斯くの如き者でなけ
ればならぬ。我々が神に祈り、又は感謝するといふも、自己の存在の爲にする
のではない。己が本分の家鄕たる神に歸せんことを祈り又之に歸せしことを感
謝するのである。又神が人を愛するといふのも此世の幸福を與ふるのではな
い、之をして己に歸せしめるのである。神は生命の源である、我は唯神に於て
生く。かくありてこそ宗　教は生命に充ち、眞の敬虔の念も出でくるのであ
る。單に諦めるといひ、任すといふ如きは尙自己の臭氣を脫して居らぬ、未だ

眞の敬虔の念とは云はれない。神に於て眞の自己を見出すなどいふ語は或は自己に重きを置く樣に思はれるかも知らぬが、これ反つて眞に己をすてゝ神を尊ぶ所以である。――と神即ち佛と人の關係とを闡明せられて居る。そして――神と宇宙との關係は藝術家とその作品との如き關係ではなく、本躰と現象との關係である。宇宙は神の所作物ではなく、神の表現である。外は日月星辰の運行より内は人心の幾微に至るまで、悉く神の表現でないものはない。我々は此等の物の根抵に於て一々神の靈光を拜することが出來るのである。ニュートンやケブレルが天体運行の整齋を見て敬虔の念に打たれたといふ樣に、我々は自然の現象を研究すればする程、其の背後に一つの統一力が支配して居るのを知ることが出來る。學問の進歩とは斯の如き智識の統一を云ふに過ぎないのである。斯く外は自然の根抵に於て一つの統一力の支配を認むる樣に、内は人心の根抵に於ても一つの統一力の支配を認めねばならぬ。人心は千狀萬態殆んど定

法なきが如くに見ゆるも、之を達觀する時は古今に通じ東西に亘りて偉大なる統一力が支配して居る樣である。更に進んで考へる時は、自然と精神とは全然沒交渉の者でない。彼此密接の關係がある。我々は此二者の統一を考へずには居られない。即ち此二者の根抵に更に大なる唯一の統一力がなければならぬ。哲學も科學も皆此統一を認めない者はないのである。而して此統一が即ち神である。勿論唯物論者や一般の科學者のいふ樣に、物體が唯一の實在であつて、萬物は單に物力の法則に從ふものならば、神といふやうな者を考へることは出來ぬであらう。併し實在の眞相は果して斯の如き者であらうか。――物体といふも、我々の意識現象を離れて別に獨立の實在を知り得るのではない。我々に與へられたる直接經驗の事實は唯この意識現象あるのみである。空間といひ、時間といひ、物力といひ、皆この事實を統一說明する爲に設けられたる概念にすぎない。物理學者のいふ樣な、すべて我々の個人の性を除去したる純物質と

いふ如き者は最も具體的事實に遠ざかりたる抽象的概念である、具體的事實に近づけば、近づく程個人的となる。最も具體的なる事實は最も個人的なる者である。此故に原始的說明は神話に於ての樣に、凡て擬人的であつたが純智識の進むに從ひ益一般的となり抽象的となり遂に純物質といふ如き概念を生ずるに至つたのである。併し、かくの如き說明は極めて外面的で淺薄なると共に、かゝる說明の背後にも、我々の主觀的統一なる者の潛んで居ることを忘れてはならぬ。最も根本的なる說明は必ず自己に還つて來る。宇宙を說明する秘鑰は此自己にあるのである。物体に由りて精神を說明しやうとするのはその本末を顚倒した者といはねばならぬ。——と。絕対に物体に由りて精神を說明しやうとする人は、物質のみに拘はれて居るのである。そしてそこに統一力のあることをも知らない人である。物質と物質との間、即ち宇宙に大なる統一力の存することは科學が次第々々に証明し行かうとし、自己内在の精神にも、統一

力が存し、而して宇宙の大なる統一力と相統一總合して更に一統一力となるものが神であり、佛であることは前述によつて明かであらうと思ふ。虎嘯けば大風吹く、龍吟ずれば雲おこるといふも、要するに日蓮聖人がこの全宇宙の統一力の偉大なるを暗示せられたのに過ぎぬのであるが、此の御言葉によつて、佛と人、佛と宇宙、統一力の何ものなるかを充分會得せねばなるまい。

■夫れ老狐は塚をあとにせず、白龜は毛寶が恩を報ず。……（報恩抄）〔恩〕

箸ごらば天地御代の御めぐみ、父母や主人の恩を味へ——と誰れかが申したやうに、日蓮聖人は人の恩を無駄にしてはならぬと訓められるのである。禮記に——狐死して正しく丘に首するは仁也——陳註に——狐は微獸と雖も丘は其の窟藏せし地、これ亦生きて此に樂しむ。故に死に及びて、猶ほ其の首を正しく丘に向ふ。其の本を忘れざるなり——である。狐すらこのやうに本を忘れな

いで居る。搜眞記に――毛寶人の白龜を釣り得たるを見て、購うて之を江中に放つ。寶後ち將軍となり、戰敗れて江に投ず、物を躡著するが如し。漸く浮んで岸に至る。寶之を視れば乃ち昔日放ちし所の龜なり――とある。龜にしても斯の如く恩を報ずるではないか。されば日蓮聖人は――畜生すら斯の如し、況人倫をや――と申されるのである。

そこで報恩の道理を考へねばならぬ。親の恩は海山よりも深くして高しと、昔から敎へられて居るのを、茲に思ひ出して考へる要用が起つて來た。何故に親の恩は海山よりも深くして高いのであるかと、兎角新しがる人達には餘計に考へて貰はねばならないのである。素より情合だとか、愛情だとか、一言にして盡くせば、それで濟ませぬとも限らぬが、されば情合なり愛情とは如何なるものかと再考する要があるではないか。又、親は子を生みたるを以て養育するの義務あるは當然のことで、その義務を履行したればこそ、更に子より報償を

求むなどゝは義務を忘れた利己の固形物となるではないかと云ふ若い人達も居るやうである。これ等の人達や、報恩の道理を誤解して居る人々に左に寸言を呈して置かう。親が子を養育するのは素より親の義務であらう、併し、只義務であるからと思つて、今日如何なる貧困者でも子供を養育して居るであらうか否やを見る必要がある。如何にも子供を養育することは親の義務である。この義務を果たさずして親の資格を論ずるのは丁度山へ登つて海の魚を求めやうとするのと全じである。こんな義務だとか報償だとかを考へないで、昔から今日までの親子の關係の事實そのものを觀るが宜い。そこには親は自分の利害關係を忘れて、子の爲よかれかしと願ひ、我身を忘れて子に福利の來らんことに、努力して居るではないか。この利害關係を忘れて子の爲に努力する心が所謂親の慈悲で、そこには毛頭も打算的の考へが含んで居ないのである。されば身には敝衣を纏ふとも、口には如何に粗食を啖ふとも、子の爲にはいとはぬといふ

心は、實に美しい情であると云ふことが出來るので、これが眞の親の愛であらねばならぬ。この美しい情によりて育てられたものは、よし法律には親を養ふ義務なしと名言せられて居ても、天命に從ふを善なる所以を知つて居るものは、やがて自分の利害關係を打ち忘れて親の爲に努むであらう。老いては子に從ふことは云ふものゝ、子は老いたる親を捨て置く譯のものでない。所謂孝の一部分なりとも盡くす心が、こゝにいふ報恩となり人道の華となるのである。年が行く、世の中が分る。暮し向きが六ケ敷なる事も分れば、色々と自分の智識が進んで來ると、時代の差異や境遇の轉變につれて、何時かしらぬ間に親を粗漏にあつかふやうになる。それでは本當に親の慈悲を知らず、まして主人や君主や長者、先輩の慈悲をも、尙釋尊の慈悲を知らぬものであるといふことが出來る。老孤、白龜すら本を忘れず報恩するに、人は何うしてそのまゝで濟まされるものだらうか。よし、手段を異にすると云つても、恩を報ずる本の親に對して報

恩の念が薄いやうでは、嘗ての日に情を受けた人に對しても、又慈悲深き釋尊の御心に對しても、言語道斷であらう。この間の消息を各自が自覺して、報恩の念を厚ふせねばなるまい。老孤白龜に劣る勿れと、日蓮聖人の申さるゝ御言葉には深い意味があると思ふが宜い。

■惡人も女人も畜生も地獄の衆生も十界ともに即身成佛と脫かれ候は、水の底なる石に火のあるが如く、百千萬年闇き所にも燈を入ぬれば明くなる。世間のあだなるものすら加樣に不思議あり、何に況や佛法の御法の御力をや。……（妙法尼御前御返事）〔光明〕

男も女も、善人も、惡人も、浮世の兒であれば、獸でも鳥でも、植物でも、鑛物でも、果ては細菌に至るまでも自然の兒である。宇宙萬象の變化は、此等諸種の兒等が互に活動し、往來して起ることは今更云はずとも明かであらう。

この活動の裏には不可思議の能力が含まれて居る。何うして恁ういふ變化や現象が起るかと科學的に解釋する事が出來ぬほど美妙の働を爲すものもある。最近の科學は非常の進歩を來たして、かの細菌の發達から人体に及ぼし他の動植物等に及ぼす能力等を説明し証明するやうになつた。何れ近き將來には、寄つては興し、引いては寄せる流轉の波や變化の潮に漂ふ自然の萬象を忌憚なく証明解釋するに至るであらうが、まだ充分に諸種の森羅萬象を解説するには至らぬ。この科學で説明が出來ぬ不可思議なる現象は或は哲學の力を籍らねばならぬとしても、眼前に披瀝された以上は只、不可思議として吾々はながめざるを得ぬばかりである。併しこゝに不可思議として絶えず光明に浴して人道を履むことの出來るものがある。それは河中の石や底となれる岩中に火が出るの不可思議ではない。又、空中や水中から火が出るの不可思議でない。云はゞ離れやうとして離れられぬ親子の縁も或はその一つかも知れぬ。夫妻の情もその

一つかも知れぬ、君を愛して身命をいとはぬこともその一つであらう。尚我々が不可思議中の不可思議として、科學の説明することの出來ぬものが、釋尊一代の教の中に存するのを見るのである。一言に釋尊は慈悲を説くと云ふも、この慈悲そのものが、凡ての人を濟度し、行く不可思議さ、又、一身即三身に自然と人が引き入れらる魅力は恐らく哲學の説き得られる所でもなければ科學の証明し得られる所でなからう。佛陀これを妙といふのであるが、この妙から、社會圓滿に發展し行く妙を生み、人の情に歸趣して圓滿に生活し得る妙が生れるのである。この妙の妙たる所を知らず、佛陀の殘せる光　明に浴することも出來ずして、只流轉に任かして身心の費消を計る、此の頃の新しい人達は一を知つて十を知らず、單純なる事實のみを知つて復雜なる變化を知らざるものであらう。聖人千年以前に既に今日の若い人達を渴破せらるゝは蓋し異數である
と心得ねばならぬ。

■人の心は禽獸に同じく主師親を知らず、何況佛法の邪正、師の善惡は思ひもよらざるなり。……（富木第七書）〔凡夫と慾〕

法華經譬喩品第三に――凡夫の淺識くして深く五慾に著む――とある。五慾とは、即ち慾情で眼の色慾、耳の聲、鼻の香、舌の味、身の觸の慾をいふのである。母親の懷に抱かれて居る時からの食慾は老いて白髪に至るまで附き纏ふのが凡夫の常である。年頃になれば食慾の上に色慾を起し、中年以后は迷利や虛名の慾を更に起し初める。そして愈々自分も此の世に爲すことが出來ないと悟つた時に、來世の安樂を期待する慾に惱まされて居る。世間皆そうである。云はゞ人間一生の間を自分が思ふまゝの、欲するまゝに、あれもこれもと望んだり願つたりする。そこには何んの爲にといふ理由もない。丁度犬が朝から晩まで道路を嗅ぎつゝ食を求むるやうに、鷄が未明に泣いてからねぐらに歸る時まで、首を動かしては餌を探ね、足で搔いては餌を求めて少しも休まないのと

仝じである。恁うして一生を送るのが人間の事實であらう。これが所謂凡夫の凡夫たる所であつて、人間味の離れぬ所であらう。佛法では禁慾して人に道を與へて、禽獸と仝じからざる門戸に入れと吾々に勸めて居る。茲に强いて五慾を絶てとは云はぬが、せめて親の恩なり、師の恩、主の恩を知る丈の心を凡ての人々から望みたい。權利義務の話しではない。「我と來て遊べや親のない雀」と一茶が駄句つた句の味を見ることである。同情仁慈を丸藥にして毎日三回宛飲んで、そこに眞實に人間らしい所、本當の人間味を離さぬやうになつて貰い度と云ふのである。さすれば日蓮聖人が主師親を知らずとか、何況佛法の邪正、師の善惡は思ひもよらざるなりと御歎き遊ばさずに濟むのである。併し世間は一般に凡夫が多い丈、そこに吾々の使命がある。曰く眞理を体現して正道にすゝむこと此れである。南無妙法蓮華經。

■此の國の一切衆生の爲には敎主釋尊は明師にて御座するぞかし。

父母を知るを師の恩なり。黑き白きを辨まふも釋尊の恩なり。

……（一谷入道御書）〔佛の恩〕

國難を予言せられて爲政家を誡しめられ、國家の安危を痛切に心勞せられて警告せられた日蓮聖人は實に愛國の士であらねばならぬ。「立正安國論」を提げて、我が日本の將に危機に陷らむとするを警告せられ謗法にかたよりて念佛三昧に沒頭せる幾多の士を救はんと努號せらるゝ聖人こそは實に釋尊の教へを眞實に理解せられた名僧と云はねばならぬ。無量義經に――衆生の性慾同じからざるを以て、種々に法を說く、種々に法を說くことは方便力を以てす、四十餘年には未だ眞實を顯はさず――とある。法華經に――我今喜んで畏なし、諸の菩薩衆の中に於て正直に方便を捨てゝ但無上道を說く――とある。即ち法は一にして二なく三もないと釋尊御自分が說かれて居るので、此れを能く理解せらるればこそ、聖人も法華經の他の經よりも眞實なるを天下に知ろし召された

のではないか。思へば釋尊は御年三十才にして成佛ましてより四十有餘年の間或は「華嚴」を說かれ次いでは「阿含」「方等」「般若」を說かれて諸種に迷へる衆生の個々に就いて法の一なるを種々に方便を變へて說かれたのではあつたが、眞實の道として、法華經を說かれたのは、それ以后のことである。最后「涅槃」を說かれても、それは釋尊一代に述べられた諸種の經典を一括して、再び概略を說かれたものであるから、眞實の道として釋尊が御一生の血液を注入せられたのは、素より法華經に述べられた事であるのだ。それには、凡て人倫の道も、修得の効果も、又宇宙對人生の諸問題をも、解釋せられて万古不易の眞理を闡明せられたのである。何を師とするにしても、人生の歸趣を明にする人ほど、吾々の仰ぐ師ではないか。社會人心を統一して安心立命の妙諦を示される人こそ、吾々の師ではないか。一元二元と爭ふて哲學の問題を何時までも評論せるに、一の燈明を指し示さる人こそ吾々の師である。政治　道德、教育、科學も、

皆この人の指し示す道に動かされ行くこと、素より云はずもである、世界三聖の中、釋尊は孔子の如く斷片的に人を敎へず、耶蘇の如く自己を本位こせず、よし方便を異にするにしても、最后道を說くに至るまで、順々こして秩序そなはり、恰も階段を登りて、遂に成佛するが如く人を誘導せられた點は、確に萬世の師こして吾々が仰がねばならぬ所である。聖人、此を喝破せられて、斯く申さるゝ以上、吾々は此に大に猛省する所がなければならぬ。

■三世の諸佛の世に出させ給ひても、皆四恩を報ぜよと說き、三皇五帝孔子老子顏回等の古の賢人は四德を修せよとなり。……

……（上野殿御消息）〔四恩四德〕

三世の諸佛こは過去、現在、未來に渡る佛のこと、三皇五帝こは包犧、女媧、神農の三皇こ黃帝、顓頊、帝嚳、唐堯、虞舜の五帝をいふ。そして聖人は——四德こは、一には父母に孝あるべし。二には主に忠あるべし。三には友に合ふて禮あるべし。四には劣れるに逢うて慈悲あれこなり。一に父母に孝なれこは、たこひ親はものに覺ねずこも、惡ざまなる事をいふこも、聊かも腹も立てず誤る顏を見せず親の云ふ事に一分も違へず。親によきもの與へんこ思ひて、せめてやるものなくば一日に二三度笑みて向へこなり。二に主に合うて忠あるべしこは、聊も主にうしろめたき心あるべからず。たこひ我身は失はるこも、主には搆へて善かれこ思うべし。かくれての信あれば顯れての德ある也こ。三には友に値うて禮あれこは、友達の一日に十度二十度來るこも、千里二千里來る人の如く思ふて禮儀いさゝか疎に思ふべからず。四に劣れる者に慈悲なれこは、我れより劣りたらむ人をば我子の如く思うて一切あはれみ慈悲あるべし。此を四德こ云ふ也。是の如く振り舞ふを賢人こも聖人こも云ふべし。此の四德を振り舞ふ人は餘の事にはよからねごも善き者なり。外典三千卷をよまねごも讀みたる人こなれり。佛敎の四恩者、一には父母の恩を報ぜよ。二には國主の恩を

報ぜよ、三には一切衆生の恩を報ぜよ。四には三寶の恩を報ぜよ。一に父母の恩を報ぜよとは、父母の赤白二諦和合して我が身となる。母の胎内に宿る事二百七十日九月の間三十七度死ぬるほどの苦みあり。生み落す時堪へがたしと思ひ念ずる息項より出る煙り梵天に至る。さて生み落されて乳をのむ事一百八十餘石。三年が間は父母の膝に遊び、人となりて佛教を信ずれば先づ此の父母の恩を報ずべし。父の恩の高き事須彌山猶ひくし、母の恩の深き事大海返りて淺し、相携へて父母の恩を報ずべし。二に國主の恩を報ぜよとは、生れて已来衣食のたぐひより初めて皆是れ國主の恩を得てある者なれば、現世安隱、後生善處と祈り奉るべし。三には一切衆生の恩を報ぜよとは、されば昔しは一切の男は父なり女は母なり、然る間生々世々に皆恩ある衆生なれば皆佛なれば皆佛になれと思ふべきなり。四に三寶の恩を報ぜよとは、最初成道の華嚴經を尋ぬれば、經も大乘、佛も報身如來にて座ます間、二乘等は晝の梟、夜の鷹の

如くして、かれを聞くこいくごも耳しゐ目しゐの如し。然りと雖も四恩を報ずべきかと思ふに、女人を嫌はれたる間母の恩報じ難し。次に佛、阿含小乘經を說き給ひし事十二年、是れこそ小乘なれば、我等が機に隨ふべきかと思へば、男は五戒女は十戒法師は二百五十戒尼は五百戒を持ちて三千の威儀を具すべしと說きたれば、末代の我等かなふべしとも覺ねば母の恩報じがたし。況んや此の經にも嫌はれたり。方等般若四十餘年の經々に皆女人を嫌はれたり。但し、天女成佛經觀經等にすこし女人の得道の經文有りこいへども但名のみありて實なきなり。其の上未顯眞實の經なれば如何が有けん、四十餘年の經々に皆女人を嫌はれたり。又最后に說き給ひたる涅槃經にも女人を嫌はれたり。何れか四恩を報ずる經有ると尋ぬれば法華經こそ女人成佛する經なれば八歳の龍女成佛し、佛の姨母憍曇彌、耶輸陀羅比丘尼記別にあづかりぬ。されば我等が母は但女人の體にてこそ候へ、畜生にもあらず蛇身にもあらず。八歳の龍女だ

にも佛になる、如何ぞ此の經の力にて我が母の佛にならざるべき。されば法華經を持つ人は父と母との恩を報ずるなり。我が心には報ずると思はねども此の經の力にて報ずるなり。――と說かれて居る。三寶の恩に報ずると云ふは、佛、法、僧あつてこそ吾々が迷を轉じて悟りを開き得るのであるから、此れに報ぜねばならぬといふのである。それで四德と四恩との關係も比較して明瞭に了解されたことゝ思ふが何故にこの四德四恩を吾々が体現せねばならぬかと、殊更に譯分らずに新しがる人達には反省をうながしたいのである。そして人生根本の歸趣と此等四德四恩との關係をも考量して、そこに大悟し得る一門に至らねばなるまい。

第十　信心信仰　教理　實教
依法　修行　体得　法華
女人成佛　外道と法華經

▣塹堤漏らざれば水失る事なし、信心の心全ければ平等大慧の智水乾く事なし。……（秋元御書）〔信心信仰〕

或る人の歌に――いくたびか法の時雨にあひながら、染むるに難きわが心かな――とある。兎角口でこそたやすく信心とか信仰とかいつて居るが、眞實に信仰し、信心することは却々容易な事でなからう。併し、世の中の人には、自分の經驗から一種の信仰を起す人もある。又宗教教理に誘はれて信仰する人もある。又、只自分の將來の都合には宜いといふ丈の考から宗教に飛び込む人がある。恁ふいふ信仰は自我のものであつても眞實の信仰と

はいひ難いであらう。何故こなれば自分こいふものが、何處までも着き纏ふて居るからである。本當に信心するこいふ事は自分そのものを忘れて、神なり佛なりに心を捧げて神や佛の心に自分の心がはまり込んで居るものでなければならぬのである。恁うすれば將來自分の身が幸福になるこかいふやうな忘想があつては本當の信仰こも信心こも云ひ難いものが出來上る計りである。佛でも神でも、そんなに自分の勝手のまゝになるものでない。云はゞ信心する自分の心が神なり佛の心こ一緒でなければならぬ。全く自分こいふものを捨てゝ佛の心に喰ひ入らねばならぬのである。自分を忘れた所謂忘我であつてこそ、信仰であつて、そこに行ふ自分の行爲が信仰の華こもなるのである。信ずればこそ解することが出來、そして行つて此れを証するこが出來るこいふのも、一面此れを逆に說いた說方であらう。知つて信ずるは自分の經驗からである。知らずして信ずるに至るのは自分の直覺からである。直覺には經驗の纏りがない。經

驗の手を借らないでものゝ本躰を知ることが出來るのである。この直覺の起るこきには自分こいふ感じはない。そこには第三者の眼に映ずる絕對忘我の境があるばかりである。佛なり神なりの心を直覺によつて知るこきに本當の信仰や信心が起るのである。自分の爲の信心であれば、聖人の云はるゝ通り堤漏れて水失し、平等大慧の智水が何時も乾いて居るのであつて、本當の信心でも信仰でもないのだ。智の極み得ざる所が信でなくて寧ろ智の極み得た所に信仰があるのだ。云はゞ哲學の極致は宗教の極致こ一致するがやうで、智こ信こは何處かで一致するのだ。その時初めて平等大慧の智水が五躰に漲つて、眞實に信仰の人こなるこが出來るのである。

■外道は佛經を讀めども外道と仝じ。蝙蝠が晝を夜と見るが如し。
又赤き面の者は白き鏡を亦赤しと思ひ、太刀に顏をうつせるもの圓かなる面を細長しと思ふに似たり。…（妙密上人御消息）〔信仰〕

獨乙の文豪ゲーテは――信仰は一切の智識の終極なり。端緒にはあらず。――と云つた。素より眞の信仰は一切合切知り抜いてこそ始めて起るのであるかも知れぬ。併し智識の終極を求めて信仰を得るよりも所謂共鳴する所によつて直に信仰を得ることがある。譬へば等しく眞理を説く孔子にしろ、耶蘇にしろ釋尊にしろ、孔子全体の有する智識、耶蘇、釋尊全体の有する智識そのまゝを繼受することなくして吾々は孔子を信じ、耶蘇を信じ、釋尊を信ずることが出來て直に信仰に飛び得らるゝやうなものである。信仰の科學的解剖は述べずとも濟む。路行く老婆の何處を己が宿とも知らず佛に誘はれるまゝに自若として己れを忘れるのも何處となく佛と相共鳴する所があるのであらう。幾十百里の雲水に身を任して寐ぬるに床なく、喰ふに食なきをも厭はず、無念無想に彷徨し行く若い男も何處となく佛と相共鳴する所があるのであらう。共鳴と信仰到底離すべきものでない。ゲーテの所謂智識の終極よりも共鳴の一機がこれ

ほど信仰を深からしめるかは、これを事實に照しても分る。思ふに佛道以外の外道――孔子や孟子等の教を遵奉して居る者は、只だ外道のみの眼を以て佛典を讀むに過ぎないで共鳴の響を立てぬものである。佛典そのものを信ずるには餘りに外道染みて居るものである。直に佛となつて佛の心中に自分の心を打ち込む丈の信仰――少くとも自己と相共鳴する丈の信仰を持たないのであるから、丁度蝙幅が晝を夜と見誤り、白き鏡を白きと見ず、我が顔を細長きものと見るやうなものである。夜を見やうとするならば夜に入らねばならぬ。白き鏡を確めやうとするならば我身の赤き顔を忘れるまで見詰めねばならぬ。圓かなる顔を見んとすれば太刀そのものを忘れて了はねばなるまい。自分といふものを忘れてそのものに入りてこそ始めて、そのものゝ本躰が分るのであるから孔子の教や耶蘇の教を全然打ち捨てゝかゝらねば素より佛經の眞意は分りやうもない。自分を忘れてそのものに入る――云はゞ共鳴で得る信仰でなければなら

ぬ。信仰なきものに佛典の講義亦望むべからざる効果を示すであらう。聖人此の義を喝破せられて此の句を吐かる。決してゲーテが句の信仰と全一の談ではない。

■教の淺深を知らざれば理の淺深辨る者なし。……開目鈔〔教理〕

これは日蓮聖人が華嚴宗の澄觀師、法相の慈恩師、三論の喜祥師、眞言宗の弘法師に對して云はれた御言葉である。密嚴經、大雲經、六波羅密經、解深密經、大般若經、大日經、華嚴經、涅槃經より引用して法華經の優劣如何を論ぜられた時の句である。優劣如何のことは茲に詳論細述するにも及ぶまいが、日蓮聖人が兎角大言壯語すると云はるゝ位に自信の動かし難く造詣の深い所はこの句で充分分ることゝ思ふ。さればこの句が吾々に教へる所としては吾々は茲に何事にまれ研讃せよと命ぜられ、深く探究せよと仰せられたことゝ思つて誦せずばなるまい。素より釋尊が吾々衆生を濟度せらるゝ諸の教を深く探らね

ば、その教理の深淺を辨ることは出來ぬ。釋尊の云はるゝ歸着點が何處で、此を演譯せられ、又此に歸納せらるゝ御言葉は何んであるかを知る必要もあらう。併し、又一宗教に止まらず万事にこの金言を當てはめて考へて見る必要も無いではない。勿論一宗教に就いても、哲學に於ても、其他科學藝術に於ても全樣に考へられることは出來る。研讃に研讃し、考証しつゝそこに確固たる標準に優劣正邪曲直を辨ずること、凡そ人に對して物を教へ物事の相對如何を言はんとする者の第一に執る可き務であらう。然るに當代如何の造詣によりて優劣如何を論ずるものがあるであらうか。思へば淺學を顧みず、只大言壯語のみの手段方法に潤飾して得たり賢しとする者があるのには吾々は哀まずばなるまい。諸經を渉獵玩味せずして佛法各宗の優劣を論じたり、哲學科學の各書に就いて研讃せずして濛昧なる態度にて、その歸趣如何を談じたり、各作家の作物を十二分にも讀まざるに、その作物の價値を論じたり、甚しきは僅

少なる英書のみを繙いて獨佛露の哲學者藝術家を論ずる等皆然りであると云つて宜からう。或る人は恁うも云つた。眞實に研究し調査する人は容易に物の優劣大小等を言明せないと、今日蓮聖人が遺されて此の句を誦して日蓮聖人の人格を忍びつゝ、この一言と比較考量すれば、吾々は茲に動かす可らざる道理を獲得するに躊躇せないであらう。それは眞に研讃する人は容易に優劣如何を吐かずとも、一度自信の礎に樹立するを得たならば、正々堂々と優劣を論ずるものであると、見よ、日蓮聖人の佛教に對する造詣と南無妙法蓮華經の題目を樹立する自信とはこの教の淺深を知らざれば理の淺深辨る者なしとの一句と相待つて吾々は自省する所がなければならぬと、強いて當代淺學韮才を省みずして、雨后の筍の如く製本に腐心せる幾多の俗學者は勿論のこと、彼の佛語の所謂「世智辨」を體現して得々たる輩には素より教の淺深學の淺深を知らざる可く、從つて理の淺深をも辨へないであらう。吾々は何事にまれこの句を誦

して後、始めて物の優劣善惡正邪曲直の如何を談ぜねばならないのである。

■鳩化して鷹と爲り、雀變じて蛤と爲る。……（立正安國論）〔實教〕

日蓮聖人の言說を聽き、妄執既に醒つた者を指して斯くは聖人が云はれたのである。鳩化して鷹と爲るがやうに人は正道に付けばそれ丈人格が向上し、見異はれるやうな人と爲る。謗法の謗法たる所以を明にして、茲に實教の動かす可らざるを確知すれば、恰も雀變じて蛤となつたやうにそれ丈人は賢くなつたのである。一歩は一歩より向上發展し行く人格の經路を篤と見られて、日蓮聖人は――悅ばしい哉、汝蘭室の友は交つて麻畝の性と成る。誠に其の難を顧み專ら此の言を信ぜば風和ぎ浪靜にして不日に豐年ならん耳――と悅ばる。併し、向上する人は當時極く少數であつた。云はゞ絕無といふほど當時の人は釋尊の實教が法華經にあることを知らないで念佛三昧に沒頭して居た。一日も早く恁のやうな人々が正法實教に蘇り、釋尊の御遺志を體現して、法華

經に歸依すれば必ずしも鳩化して鷹となり、雀變じて蛤にならぬとも限らぬと日蓮聖人は申されるのである。この意味をよく味つて吾々は日蓮聖人の御遺志を考量せずばなるまい。されば聖人は――但し人の心は時に隨つて移り、物の性は境に依つて改る。譬へば猶水中の月の波に動き、陳前の軍の劍に靡くがごとし。汝當座は信ずと雖、後定めて永く忘れん。若し先國土を安んじて理當を祈らんと欲せば、速に情慮を廻らし急いで對治を加へよ――と誡められる。水は器の方圓に從ふが如く人の心はその時その時の境遇々々に依つて變異し時代々々につれて流轉するものであるが、それが爲に一度抱いた信仰を捨てゝはならぬと誡められるのである。素より信ずるには克くその正邪曲直を辨へ正道に入つて實教を仰めねばならぬ。万古不易の眞理を示し給ふた釋尊が、主として全一生の血液を注ぎ給ひ、民衆の歸依する所を指されたるこの「法華經」の文言こそは凡夫の吾々が受くる時代や境遇に依つて左右し得べきものでない。

從つて謗法を捨てゝ實教に一度蘇生した吾々は時代や境遇に依つて、一度鳩の鷹にならむとして鳩に逆戻り、雀の蛤にならむとして又雀に逆戻るやうなことがあつてはならないのである。思ふに日聖蓮人の意志は實に鳩や雀である凡ての人間を殘らず鷹や蛤と爲すことであるのがこの一句で分る。そしてこの句の裏面に存する意味を克く探つて見ると日蓮聖人は何日になれば凡ての人が釋尊の實教が法華經にあるを知り此に歸依することが出來て万民安息し得ることが出來るのであるか、思はず知らず、鳩化して鷹と爲り雀變じて蛤となると叫び得らるゝ時は何日であるかと願はるゝ意味がないでもなからう。されば吾々は日蓮聖人のこの御願に對して動かす可らざる信仰の絆につれて釋尊の御遺志を體現し向上に向上して人格の尊嚴を維持することに務めねばなるまい。鳩化して鷹となり、雀變じて蛤と爲ることは要するに暗に吾々の修養努力を祈願せらるゝ日蓮聖人の御遺志として尊重せずばなるまい。

■依法不依人、此れを思ふ可し。……（松野殿御返事）〔依法〕

人によつて法を說のも宜いが、自分は法によつて修め、人による可らずと論されるのである。聖人は例証を引かれて――されば昔獨の人有りて雲山と申す山に住み給へり。其の名を雪山童子といふ。蕨を折り果を拾うて命を繼ぎ、鹿の皮を着物と拵へ肌をかくし、閑に道を行じ給ひき。此の雪山童子思はれけるは、倩世間を觀ずるに、生死無常の理なれば、生ずる者は必ず死す。されば憂世の中のあだ果なきこと、譬へば電の如く、朝の露の日に向ひて消るに似たり。風の前の燈の消易く、芭蕉葉の破れ易きに異ならず、人皆此の無常を遁れず、終に一度は黃泉の旅に趣くべし。然れば冥途の旅を思ふに闇々として暗ければ日月星宿の光もなく、せめて燈燭として燃す火だにもなし。斯ゝる闇き道に又ともなふ人もなし。娑婆にある時は親類、兄弟、妻子、眷屬集まりて、父は憐みの志高く母は悲みの情深く、夫妻は鴛鴦の衾の下に枕を並べ

遊び戯る中なれども、彼の冥途の旅には伴ふ事なし。冥々として獨行く、誰か來りて是非を訪はんや。或は老少不定の境なれば、老いたるは先立、若きは留る、是は順次の道理なり。歎の中にせめて思ひ慰さむ方も有りぬ可し。老たるは留まり若きは先立、されば恨の至つて恨しきは幼して親に先立つ子、歎の至つて歎かはしきは老て子を先立つる親なり。是の如く生死無常、老少不定の境、あだに果なき世の中に、但晝夜に今生の貯のみ思ひ、朝夕に現世の業のみなして、佛を敬はず、法を信ぜず、無行無智にして徒に明し暮して、闇魔の廳庭に引き迎へられん時は、何を以てか資糧として三界の長途に行かん。何を以て船筏として生死の曠海を渡りて實報寂光の佛土に至らん哉と思ひ、迷へば夢、覺れば寤、しかし夢の浮世を捨て寤の覺を求めんにはと思惟し、彼の山に寵りて觀念の牀の上に忘想顚倒の塵を拂ひ、偏に佛法を求め給ふ所に、帝釋遙に天より見下給ひて思食さるゝは、魚の子は多けれども、魚となるは少

なく、菩提樹の花は多く咲け共果に成るは少なし。人も皆此の如く、菩提心發す人は多けれども、退せずして實の道に入る者は少し。都て凡夫の菩提心は多く惡緣にたぶらかされ、事にふれて移り易きものなり　鎧を着たる兵者は多け れ共、戰に恐をなさざるは少きが如し。此の人の意を行きて試みばやと思ひ、帝釋鬼神の形に現じ童子の側に立ち給ふ。其時佛世にましまさざれは、雪山童子普く大乘經を求むるに聞こゝあたはず。時に諸行無常、是生滅法といふ音ほのかに聞ゆ。童子驚き四方を見給ふに人なし。但鬼神近附きて立てり。其の形けはしく怖ろしくして、頭のかみは炎の如く、口の齒は劍の如く、目を瞋らして雪山童子を守り奉る。此を見るにも恐れず。偏に法を聞く事を喜び怪しむ事、譬へば母を離れたる犢ほのかに母の音を聞つるが如し。此の事誰か誦しつるぞ、未殘の語あらんとて、普く尋ね求むるに更に人もなければ、若し此の言葉は鬼神の說るかと疑へども、よもさもあらじと思ひ、彼の身は罪報の鬼神

の形なり。此の偈は佛の說き給へる語なり。かゝる賤しき鬼神の口より出づべからずと思へども、亦殊に人もなければ、若し此の語　汝が說つるかと問へば、鬼神答へて云ふ、我に物な云いそ、食せずして日數を經ぬれば飢疲れて正念を覺えず。既にあだむこと云ひつるならむ。我うつける意にて云へば知る事もあらじと答ふ。童子の云く、我は此の半偈を聞きつる事、半月を見る如く、半なる玉を得るに似たり。慥に汝が語なり、願くば殘る語を說き給へとのたまふ。鬼神の云く。汝は本より悟あれば聞かずとも恨は有るべからず、吾れは今飢に責められたれば物を云ふべき力なし。都て我に向ひて物な云ひそと云ふ。童子猶物を食ひては說かんやと問ふ。鬼神答へて、食ては說てんと云ふ。童子悅んで、さて何物をか食とすると問へば、鬼神の云ふ、汝更に問ふ可らず、此れを聞いては必ず恐れを成さん。亦汝が求むべき物にもあらずと云へば、童子猶貴めて問ひ給はく、其の物をとだにも云はゞ心みにも求めんとのたまへば、鬼神

の云く、我は但、人の和らかなる肉を食し、人の溫かなる血を飲む。空を飛び普く求むれども、人をば各守り給ふ佛神の御座せば心に任せて殺しがたし。佛神捨て給ふ衆生を殺して食するなりといふ。其の時雪山童子の思はく、我法の爲に身を捨て此偈を聞き畢らんと思うて、汝が食物茲にあり外に求むべきにあらず。我身未死せず其の肉あたゝかなり。我身未寒ゐず其の血溫かならむ。願くば殘の偈を說き給へ、此の身を汝に與へんといふ。時に鬼神大に瞋りて云ふ、誰か汝が語を實とは憑むべき。聞いて後には誰をか証人として斜さんと云ふ。雪山童子の云く、此の身は終に死すべし。徒に死せん命の法の爲に投ば穢なく汚しき身を捨てゝ後生は必ず覺を開き佛と成り、淸く妙なる身を受く可し。土器を捨て寶器に替るが如くなる可し。梵天、帝釋、四大天王、十方の諸佛、菩薩を証人とせん。我れ更に僞る可らずと宣へり。其時鬼神少し和いで、若し汝が云ふ處實ならば偈を說かんと云ふ。雪山童子大いに悅んで身に着たる

鹿の皮を脫いで法座に敷き、頭を地に付けて、手を合はせ跪き、但願くば我が爲に殘の偈を說き給へと云ひて至心に深く敬ふ。偖法座に登り鬼神偈を說いて云はく、生滅滅已、寂滅爲樂。此の時雪山童子是れを聞き、悅び貴み給ふ事限りなく後世迄も忘れまじと度々誦して深く其の心に染め、悅ばしき處はこれ佛の說き給へるにも異ならず、歎かはしき處は我一人のみ聞いて人の爲に傳へざらむ事をと深く思うて、石の上、壁の面、路の邊の諸木ごとに此の偈を書き付け、願くば後に來らん人必ず此の文を見、其の義理を覺り實の道に入れと云ひ畢りて、即ち高き木に登りて鬼神の前に落ち給へり。未だ地に至らざるに、鬼神俄に帝釋の形と成りて雪山童子の其の身を受け取り、平かなる所に据ゑ奉りて、恭敬禮拜して云はく、暫く我如來の聖敎を惜みて試に菩薩の心を惱し奉るなり。願くば此の罪を許して後世には必ず救ひ給へと云ふ。一切の天人又來りて、善哉善哉實に是れ菩薩なりと讚め給ふ。半偈の爲に身を投げて十二

劫生死の罪を滅し給へり。――こ涅槃經にある事柄を述べられて、細々こ記されし――誠に我身貧にして布施すべき寶なく、我が身命を捨てゝ佛法を得べき便あらば、身命を捨てゝ佛法を學すべし。――こ人に依らずして、身命を捨てる覺悟で法に依つて佛法を修めこ諭さる。云はゞ我身を捨てゝ掛らねば、眞實に生きた佛法は說かれぬのである。眞實に生きた佛法こは人を濟度することである。濟度するには自分の心持なごこいふものを捨てゝ佛陀の心持を、濟度される人の心の中に直に植ゑ附けねばならぬ。その時自分こいふものがあつては佛陀の心持が汚れて了ふのである。佛陀の偉大なるを知れば依法は根本であらねばならぬ。

■所詮佛法を修行せんには、人の言を用ふ可らず。仰いで金言を守る可きなり。

……（如說修行鈔）〔修行〕

雀の千聲よりも鶴の一聲こいふことがある。喧しくいふ群雀を聽くがやうな

人の言を用ふるよりも、一羽の鶴がほがらかに鳴くやうに思はるゝ先哲の言葉を守るに已かないのである。素より人の言葉は、殊に自分を忠告し吳れる人の言葉は、尊敬して務めて甘受せなければならぬが、それよりも釋尊の一句は何れほご吾々の墨守して憚らぬものであるか躰の知れぬほご尊いものである。日蓮聖人は――我等が本師釋迦如來、初成道の始めより法華を說かんこ思し食しかごも、衆生の機根未熟なりしかば、先づ權敎たる方便を四十余年の間說き、後に眞實たる法經華を說き給ひし也。（中畧）是れより已後は唯有一佛乘の妙法のみ一切衆生を佛になす大法にて、法華經より外の諸經は一分の得益もあるまじきに、末法の今の學者、何れも如來の說敎なれば、皆得道あるべしこ思ひて、或は眞言、或は念佛、或は禪宗、三論法相倶舍成實律等の諸宗諸經を取く々に信ずる也。――こ申されて、吾々が仰いで体現すべき金言は法華經なりこ諭されるのである。法華經壽量品に――諸の善男子よ、如來の演ぶる所の經

典は、皆衆生を度し脱さんが爲なり。或は巳が身を說き、或は佗の身を說き、或は巳が身を示し、或は佗の身を示し、或は巳が事を示し、或は佗の事を示せども、諸の言說く所、皆實にして虛しからず。所以者何となれば如來は實の如に三界の相を知り見たまいつ、生死の若は退き、若は出づること有る無し。亦、在世及び滅度なる者なし。實に非ず、虛に非ず、如に非ず、異に非ず、三界の三界を見るが如くならず、斯の如き事、如來は明かに見て錯謬有ることなし。――こある。美に非ず、醜に非ず、善に非ず、惡に非ず、眞に非ずして僞にも非ざる絕對の境に入り給ふて、茲に一身即三身、三身即一身の妙を說かれたのである。この忘我絕對の境に入つてこそ、人は佛となるもの、云はゞ宇宙乾坤と融會して我れを知らず他を知らざるの境に入つて人間靈魂の偉大なる光が輝いて居るのが分るのである。凡て眞善美とか、或る一物に對して他の物を照し合して批評する言葉を全然去つた所に人間の偉大なる靈魂が漂ふて居るの

であるが、人は見て美醜を語り、聽いて眞僞をこなへ、行つて善惡を勝手に批評するものであるから、素より用ふ可き沙汰でない。人格の修養は高山樗牛の云つた如く、所詮觀心自得の外に途がないのである。樗牛曰く――吾等は押しきつて問ひ申すべし、今の世にその心の暗黑中に迷はざるもの幾人ありや。或は利に餞ゑ、或は智に渴ゑ、營々として世を夢の如くに暮す人も、若し中心を沈めて、我れの事業に何の理想ありや、我れの未來に何の光明ありや、我れの人物に何の標的ありや、われに面して笑ふもの幾百千人あるも、眞に我心を會通融和せる心は世に果して是ありやと自ら問はば如何。誰か其の身の宛ら暗中廣野に彷徨せる天涯萬里の孤客にも等しきことを感ぜざる可き。――と。榮華を夢見ず、只觀心自得の工夫に努力すれば、人の數千万言、もとより群雀の囀ずるが如く、佛の聖音宛ら一鶴の天空より下るがごとくに感ずるに至るであらう。榮枯衰盛素より世の流れである。三界それ自身より見れば一点の星にも及

ばず、然るに我れ榮ゑんと思ひ、盛ならんと希ふのは一点の星を望んで我れ偉大たらんことを希ふもののやうである。空を仰いで星に執着するの心を去、天空と我とこの歸一する所以は如何にと自得するの工夫をこらせば、人物修養の道も拓け、人格向上の一歩も進み、而して茲に榮ゑ盛ゆる動機を與ふるものである。一小事に齷齪せずして大局に眼を据ゑ心中閑日月の度量を養ふこそ修行の本領である。

■法華經を余人の讀み候は口ばかり言ばかりは讀めども、心は讀まず。心は讀めども身によまず。色心二法共に遊ばされたること

……（土籠御書）〔體得〕

そ貴く候へ。

南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と口にばかり唱へ、太鼓ばかしをならして居ても心に唱へねば駄目である。心に唱へても、行に表はさなければ駄目である。今日、釋尊の實教が法華經にあつて、法華經そのものが宇宙の絶對眞理

を闡明したりと見て、此れを讀むにしても、口ばかりで讀んで居ては駄目である。能く心を落ち附けて釋尊は何を申して居られるのであるかと靜に考へては讀み、讀んでは考へて、自分の心に納めて了はねば駄目である。そして尙、そこに万古不易の心理を索め得て、釋尊の御言葉の尊い所以が明かになれば、此を自分の身に引き比べて、宇宙の本躰と合致するやうに、佛の心と全じやうになることを努めねばならぬのである。眼や耳から入つて心の底に深く喰ひ込めば、この心から、恰も神經中樞が諸機關を操縱するがやうに　自分の身そのものを操縱して、我が心と身とを一丸とすることに務めねば眞に法華經を讀んだものと云へぬのである。聖人の御言葉が暗に此を指し示さることは吾々の特に注意して拜承せねばならぬ所である。

■根深ければ枝昌へ　源遠ければ流れ長しと申して、一切の經は根淺く流れ近く、法華經は根深く源遠し。末代惡世までも盡

きず榮べしと天台大師はあそばしたり。

……（四條金吾殿御返事）〔法華〕

この御言葉は、深く諸經を研讃せられて、法華經のみが諸經一切よりも傑出し、万古不易の絶對眞理を闡明せられたる釋尊一代五時中の精華にして正實であることを聖人が申うされるのである、既に天台大師も、「法華玄義」「法華文句」「摩河止觀」等に法華經の精華にして正實なるを述べて居る。聖德太子も「法華經義疏」を述べられて法華經の偉大なるを示されて居る。傳敎大師は天台大師の前記三大部を見て、佛敎の正統を自得して法華經の光明を時の高僧智織にさし示した。而して日蓮聖人に至つては、自ら法華經を躰現されて、大言努號せられ、眞實に釋尊の御聲を万民に聽かしめてやらうとせられたのである。是れ皆人の知る所であらう。既に法華經は佛經一切中の精華にして正實である。即ち佛敎の大樹の根の深い所のものである。古今東西の諸敎の流の源も遠い

所にあるものである。清らかき花ども見られ得ること、恰も流れて絶へぬ美しい敎の道の水のやうなものであらう。正しく實りて万世つきせぬ果實ども見られ得ることゝ、丁度、遠くさかのぼりて見られ得る彼の湛々として落ち、靜に湧きあがる靈泉のやうなものであらう。万病この靈泉に浴して治療し得らるゝが如く、一度法華經の精華に眼を注ぎて、釋尊一代の御敎そのものを拜聽し拜承すれば、心の病も忽に治愈して、清よく流れて澄める大河のほとりに、美しい花を眺めて我れを忘れるが如く、心は何時も閑である。何を苦しんで、他の諸敎に身を掠はれ、五慾に誘はれて心も空にのみ浮き上りながら、解脫も出來ずして煩悶懊惱して居るのであるかと顧みねばならぬ。

■龍女が成佛此れ一人にはあらず。一切の女人の成佛をあらはす。

……（開目鈔）〔女人成佛〕

法華經第五に――文殊師利の言はく、我海中に於て、唯常に妙法華經を宣べ

説きぬと。智積菩薩、文殊師利に問うて言はく、此の經は甚も深く微妙にして諸經の中の寶、世に希有なる所也。頗し衆生の、勤めて精進を加へ、此の經を修行して、速かに佛を得るもの有りや、否やと。文殊師利の言はく、有り。娑竭羅龍王の女、年始めて八歳なり。智慧利根にして、善く衆生の諸根の行業（衆生の諸種の根性に隨ふて行ふ業因をいふ）を知りつ。陀羅尼（萬德を包藏せること）を得て、諸佛の所説の甚深き秘藏、悉く能く受持ち。深く禪定（正しく眞理を思惟し、安靜に思慮し心を一にして動乱せしめざること）に入りて、諸の法を了達り、刹那の頃に於て菩提の心（正覺の心）を發して、不退轉なるを得たり。辯才無礙にして、衆生を慈み念ふこと猶ほ赤子の如く。功德具足して心に念ひ口に演ぶるところ、微妙にして廣大なり。慈悲仁讓、志意和雅にして、能く菩提に至れり。――とある。龍女とは娑竭羅（鹹海）龍王の女のことで、今までは女が成佛したこともなかつたが、この龍王の女である龍女のみが

始めて成佛したのである。それには法華經第五に――龍女、智積菩薩、尊者舍利弗に謂つて言はく、我寶珠を献る世尊納受けさせたまふ。是の事疾しや、否やと。答へて曰く、甚だ疾し。女の言はく、汝が神力を以て、我が成佛を觀よ、復此よりも速かならんと。當時、衆會、皆龍女が忽然の間に變じて男子となり、菩薩の行を具へて、即ち南方なる無垢世界に往き、寶の蓮華に坐して等正覺を成し、三十二相、八十種好ありて、普く十方の一切衆生の爲に妙法を演説くことを見る――とある。男でも女でも、矢張り人間である。浮き世の兒である。男のみを人間と知つて釋尊は教を垂れられたのではなく慈悲をかけられたのではない。この慈悲や教を受くる者男の人間であり女の人間であるのである。タゴール氏は――愛にありては二元と一元とは一のものとなる。愛は同時に一であり二である――と云つて居る。男女の區別によつて釋尊の慈悲を輕重すべきでない。愛を受け慈悲を受ける者、素より等しく人間である以上は法華

經以外の諸小乘經は女を男より區別して成佛せずと說く、併し釋尊の本意は孔子　一視同仁と仝じく愛の一丸として男女共に抱含せらるるを見る。今日蓮聖人は――法華已前の諸小乘經には女人成佛をゆるさず、諸大乘經には成佛往生をゆるすやうなれども或は改轉の成佛、一年三千の成佛にあらざれば有名無實の成佛往生也。擧一例諸と申して龍女成佛は末代の女人の成佛往生の道を踏み明けたるなるべし。――と他經と法華經との愛の淺深、慈悲の廣狹を示さる。釋尊が女をも認容せられ、日蓮聖人も仝じく此を浮世の兒と見る以上は、吾々もこの句を誦すると共に女子を小人と等しく遇すべきものでないのを切實に知得するのである。素より女は男のそれの如くではない。併し吾々は釋尊、日蓮聖人等に敎へられずとも女子も人間であることを知る。愛の一語慈悲の二語の前には種々相を以て色別するの要なきことも知る。されば浮世の兒として女子を認むると共に、吾々と仝じく佛の子、神の子として認むる必要

はあるまいか。かの男尊女卑乃至は女尊男卑の惡弊因襲はこの龍女が成佛此れ一人にはあらず、一切の女人の成佛をあらはすの御言葉に照して打破せねばならるまい。英雄の襟度廣大なるは今更ながらに釋尊、日蓮聖人を忍びて吾々は了知することが出來たのである。

■外道の善惡は小乘經に對すれば皆惡道、小乘の善道乃至四味三敎は法華經に對すれば皆邪道、但し法華經のみ正善なり。……

……開目鈔〕〔外道と法華經〕

外道とは佛敎以外の諸敎をいふ。小乘敎とは色、慾、無色の三界內のみを說きて自悟するの敎で、四味三敎は藏通別の三敎と華嚴の乳味、阿含の酪味、方等の生蘇味、般若の熟蘇味をいふ。この句は日蓮聖人の法華經の偉大なるを示し給ふたものである。思ふに釋尊十九歲にして出家し給ひしよりあらゆる難行苦行を遂げられ、御歲三十の二月八日、月澄みて星の光の明かなる時、菩提

樹下に端座せられたまゝ大悟せられた。その時より三七日の間に「華嚴經」を說かれ次いで大悟し給ふた菩提樹を後にして波羅奈國は鹿野の苑にて「阿含」を說き出されてより四十二年間は所々にて「方等」「般若」の諸經を說かる。最後八年間は王舍城靈鷲山及虛空に於て「妙法蓮華經」を說かれ、御歲七十九の二月十五日「涅槃經」を最后の經として入滅し給ふた。此の間、所謂天台大師の得益の順序を立てゝ、釋尊一切の御經を五味に區別したる乳味より酪味、酪味より生蘇味、熟蘇味と變じ。最后に醍味最上乘の「醍醐味」を呈して來たのであつた。この「醍醐味」の「法華經」及「涅槃經」こそ最も釋尊の圓熟したる御經であつて、或は「華嚴」「方等」等の四味の經は、この前提に過ぎぬものであつたに相違ないと云はれ得る。それは法華經第二方便品に――云何なるをか諸の佛世尊は唯一大事の因緣を以ての故に、世に出現したまふとは名くるにや。諸の佛世尊は、衆生をして佛知見を開きて、清淨の道を得しめんと欲すが故に、世に

出現したまふ。衆生に佛知見を悟らしめんと欲すが故に世に出現したまふ。衆生をして佛知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したまふ。――と釋尊は說かれたのに見ても明かであらう。是れ日蓮聖人の畢生の努力と勇氣と刻苦とを生んで日本國体の樹立尊嚴を確保せしめたのである。「立正安國論」といひ其他の國諫も要するに「惡法を傳へて民心を迷はすことの世に最も非道なる」を自覺し給へる日蓮聖人が果斷と沈勇と卓見との賜物であると共に釋尊一代五時の諸經も、爲に光彩陸離たるに至つたのも、亦日蓮聖人の刻苦――努力――、卓見――沈勇の効果であることが分る。吾々はこの句に於て學ぶことは三つある。一つは聖賢といふ人達や先哲といふ人達が身の爲、人の爲に殘した教訓を日に日を次いで讀み行くこと、第二は讀み行く內に、選擇しつゝ万古不易の教訓を見出すこと、第三はその教訓を體現して行くことである。未だ孔子の斷片的なる教訓を知らない人や、クリストの傳說的教訓なるを知らず、釋

尊の譬し組織的聖典なるにしろ此を知らない人は、素より此等の諸教訓諸經典等を讀みて万古不易の金言を見出さぬばならないが、既に法華經が各聖典の精華――古今未曾有の聖典であつて須臾も離し難き万古不易の眞理を述べたるものと固く信ずるものはこの法華經に存する教訓を體現し、併せて日蓮聖人が申された「法華經のみ正善なる」所以を十二分に辨へ据かねばなるまい。

日蓮聖人之遺訓終

御遺訓索引

〔數字は本文頁數を知るべし〕

ア行 〔ア、イ、ウ、エ、オ〕

○惡の中の大惡は我が身に其の苦を受くるのみならず、子と孫と末へ七代迄もかゝり候ひけるなり。善の中の大善も又々かくの如し。……（孟蘭盆御書）　吾三

○惡は多けれども一善に勝つ事なし。……（異體同心事）　吾四

○惡人も女人も畜生も地獄の衆生も十界ともに即身成佛と說かれ候は、水の底なる石に火のあるが如く、百千萬年闇き所にも燈を入ぬれば明くなる。世間のあだなるものすら加樣に不思議あり、何に況や佛法の妙なる御法の御力をや。……（妙法尼御前御返事）　三五

○淺き罪ならば我より許して功德を得さすべし。重きあやまちならば信心を勵

まして消滅さすべし。……（阿佛房尼御前御返事）二〇七

○相搏へて相搏へて心の師ごはなるごも、心を師ごすべからずご佛は記し給ひしなり。……（義淨房御書）二一五

○如何に我が身は正直にして世間出世の賢人の名を取らんご存ずれごも、悪人に親近すれば自然に十度に二度三度其教に隨ひ以て行くほごに終に悪人になるなり。……（最蓮房御返事）一七三

○命ご申す物は一身第一の珍寶なり。一日なりごも此を延るならば千万両の金にも過ぎたり。……（依法華經可延定業）一八一

○命をつぐは人中天上に生れては長命の果報を得、佛ご成ては法身如來ご顯れ其の身虚空ご等し。力を授くる故に人中天上に生れては威德の人ごなつて眷屬多し、佛に成つては報身如來ご顯れて蓮華の臺に居し、八月十五夜の月晴天に出たるが如し。色をます故に人中天上に生れて三十二相を具足して端正なる事華の如く、佛に成つては應身如來ご顯れて釋迦佛の如くなる可し。……（妙密上人御消息）七三

○今の世を觀るに日蓮より外の諸僧、誰人か法華經に付いて諸人に悪口罵詈せられ刀杖等を加へらるゝ者ある。……（開目鈔）一六三

○飢たる代に食を施こせる人は國王ご生れて其の國豐なり。……（大田殿女房御返事）一七

○器は我等が身心を表はす。我等か心は器の如し、口も器、耳も器。……（秋元御書）一二

○器に四つの失あり。一には覆ご申してうつぶける也。又はくつがへす、又は蓋をおほふなり。二には漏ご申して水もる也。三には汙ご申して汚れたり。水淨けれごも糞の入る器の水をば用ふる事なし。四には雜也。飯に或は糞、或は石、或は沙、或は土なんごを雜へぬれば人食ふ事なし。法華經ご申す佛

の智慧の法水を我等が心に入ぬれば、或は打ち返し、或は耳に聞かじと左右の手を二つの耳に覆ひ、或は口に唱へじと吐き出しぬ。譬へば器を覆すが如し。或は少し信ずるやうなれども又悪縁に値うて信心薄くなり、或は打ち捨て、或は信ずる日はあれども捨つる月もあり。是れ水の漏るが如し。或は法華經を行ずる人の、一口は南無妙法蓮華經、一口は南無阿彌陀佛なんど申すは、飯に糞を雑へ砂石を入れたるが如し。……（秋元御書）一二

○魚は命を惜む故に池に栖むに、池の淺きことを歎いて池の底に穴を穿りて棲む。然れども餌にばかされて釣をのむ。鳥は木に棲む、木の低きことを怕ぢて木の上枝にすむ。然れども餌に欺されて網にかゝる。人もまた是の如し。世間の淺き事には身命を失へども、大事の佛法なんどには捨ることは難し。故に佛になる人もなかるべし。……（弟子檀中第二書）一三八

○臆病のもの大躰或は落ち或は退轉の心あり。……（辨殿尼御前御書）一四四

○大木の下の小木、大河の邊の草は、正しく其の雨に當らず、其の水を得ずと雖も、露を傳へ、氣を得て榮うる事に候。……（崇峻天皇御書）一五九

◎依法不依人、此れを思ふ可し。……（松野殿御返事）二五八

カ行〔カ、キ、ク、ケ、コ〕

○高山に登る者は必ず下り、我人を輕しめば還つて我が身人に輕易せられん。形狀端嚴をそしれば醜陋の報を得。人の衣服飲食をうばへば必ず餓鬼となる。……（佐渡御書）八二

◎悲しい哉瞳矇を樹たず。痛しい哉徒に邪信を催すこと。故に上國主より下國土民に至るまで皆經は淨土三部の外の經無く、佛は彌阿三尊の外の佛無

しこ謂へり。……（立正安國論）三三

○辛きを蓼葉に習ひ臭きを溷厠に忘る。……（立正安國論）一三〇

○旱魃には水を財こし、闇中には燈を財こす。……（上野殿御返事）一〇

○木は閑かならんこ思へごも風やまず、春を留めんこ思へごも夏こなる。……（妙密上人御消息）八〇

○鍛はぬ金は盛なる火に入れば早く蕩け、氷を湯に入るゝが如し。劍なんごは大火に入るれごも、暫くこけず、是れ鍛へるなり。……（四條金吾殿御返事）七五

○經文に我が身符合せり、御勘氣を蒙れば愈悦を倍すべし。例せば小乘の菩薩の未斷惑なるが願兼於業こ申して、造りたくなき罪なれごも父母等の地獄に墮ちて大苦を受くるを見て型の如く其の業を造つて願つて地獄に墮ちて苦しむに同じ、苦に代はるを悦こす。此れも又斯の如し、當時の責は堪ふ可くもなけれごも、未來の惡道を脫すらんこ思へば悦ぶ也。……（開目抄）一六三

○苦をば苦こ悟り、樂をば樂こひらき、苦樂ごもに思ひ合はせ南無妙法蓮華經こ打ち唱へ居させ給へ。……（四條金吾殿御返事）一二九

○愚者の持たる金も智者の持ちたる金も、愚者の燃せる火も智者の燃せる火も其の差別なきなり。……（松野殿御返事）九六

○藏の財よりも身の寶勝りたり、身の寶より心の寶第一なり。……（崇俊天皇御書）一五一

○外道の善惡は小乘經に對すれば皆惡道、小乘の善道乃至四味三教は法華經に對すれば皆邪道、但し法華經のみ正善なり。……（開目鈔）三七五

○外道は佛經を讀めごも外道こ仝じ、蝙蝠が晝を夜こ見るが如し。又赤き面の者は白き鏡も亦赤しこ思ひ、太刀に顏をうつせるもの圓かなる面を細長しこ

思ふに似たり。……（妙密上人御消息）二九

⊙賢人と申すは善き師より傳へたる人、聖人と申すは師無くして我と覺れる人なり。……（妙密上人御消息）一三

○賢王の世には道理かつべし。愚主の世には非道先をすべし。……（開目鈔）一九

○子に過ぐる財なし、子に過ぐる財なし。……（千日尼御返事）一六三

○子を思ふ故にや、親槻の木の弓を以て學文せざりし子に教へたり。然る間此の子無情かりしは父、憎かりしは槻の木の弓、されども終ひには修學增進して自身得脫を究め、又人を利益する身となり、立ち還りて見れば、槻の木をもて我を打ちし故なり。此の子卒塔婆に此の木をつくり、父の供養の爲に建てんけりと見えたり。……（上野殿御返事）一六七

○此の國の一切衆生の爲には教主釋尊は明師にて御座するぞかし。父母を知る

も師の恩なり。黑き白きを辨まふも釋尊の恩なり。……（一谷入道御書）二四〇

○此頃は女は尼に成りて人をばかし、男は入道に成りて大惡を造るなり。努努有るべからぬ事なり。……（四條金吾釋迦佛供養事）二〇一

○是れより已後は唯有一佛乘の妙法のみ一切衆生を佛になす大法にて、法華經より外の諸經は一分の得益もあるまじきに、末法の今の學者、何れも如來の說教なれば、皆得道あるべしと思ひて、或は眞言、或は念佛、或は禪宗、三論法相倶舍乘實律等の諸宗諸經を取々に信ずる也。……（如說修行鈔）二六五

○金は大火にも燒けず、大水にも漂はず、朽ちず、鐵は水火共に堪へず、賢人は金の如く、愚人は鐵のごとし。……（生死一大事血脈鈔）三一〇

⊙金は燒けば彌色まさり、劍はとげば彌利くなる。……（妙密上人御消息）一四九

○國王の寶には左右の大臣なり。左右の大臣をば塩梅と申す。味噌塩なければ世渡り難し。左右の臣なければ國治らず。……（南條殿御返事）四三

サ　行　〔サ、シ、ス、セ、ソ〕

○蒼蠅驥尾に付いて萬里を渡り、碧蘿松頭に懸りて千尋を延ぶ。……（立正安國論）一三五

○像法の中には天台一人法華經一切經を讀めり、南北此れを怨しかごも、陳隋二代の聖主眼前に是非を明め給ひしかば敵遂に盡ぬ。像法の末に傳教一人法華經一切經を佛説のごとく讀み給へり。南都七大寺蜂起せしかごも、桓武乃至嵯峨等の賢主我と明め給しかば又事なし。今末法の始め二百餘年なり。況滅度後の兆に闘淨の序となるべき故に非理を前として濁世の驗に召し合せられずして流罪乃至命にも及ばんとする也。されば日蓮は法華經の知解は天台傳教には千分が一分も及ぶ事なけれごも、難を忍び慈悲勝れたる事畏をも懐きぬ可し。定て天の御計に預る可しと存ずれごも一分の驗も無し、愈々重科に沈む。還つて此の事を計りみれば我身の法華經の行者に非るか。又諸天善神等の此の國を捨てゝ去り給へる旁々疑はし。……（開目鈔）二六一―二六三

○偖は男は柱の如し女人は桁の如し。男は足の如し女人は身の如し。男は羽の如し女は身の如し。羽と身と別々に成りなば何を以てか飛ぶべき、柱倒ふれなば桁地に落ちなん。家に男無ければ人の神無きが如し。公事を誰れにか云ひ合はせん。……（千日尼御返事）一七〇

○三世の諸佛の世に出させ給ひても、皆四恩を報ぜよと説き、三皇五帝孔子老子顔回等の古の賢人は四徳を修せよとなり。……（上野殿御消息）三

○四節四季取々に替れり、夏は熱く冬は冷く、春は花咲き秋は果なる。春は種子を下して秋は果を取るべし。秋種子を下して春果を取らんに、豈に取らるべけんや。極寒の時厚き衣は用なり。極熱の夏は何にかせん。涼風は夏の用なり、冬はなにかせん。佛法も亦復是の如し。……（如説修行鈔）一五五

○釋迦佛は我れを無量の珍寶を以て億劫の間、供養せんよりは、末代の法華經の行者なりとも供養せん功德は百千萬億倍過ぐべしとこそ說かせ給ひて候に、法華經の行者を心に入れて數年供養し給ふこと、有り難き御志哉。……（南條兵衛七郎殿御返事）一七九

○聖人の世には法華經の實義顯るべし等と心得べし。……（開目鈔）三

○塩の干と滿と、月の出ると入ると、夏と秋と冬と春との境には必ず相違する事あり。……（兵衛志殿御返事）六

○宿業はかりがたし、鐵は炎打て劍となる、賢聖は罵詈して試みるなる可し。

○所詮佛法を修行せんには、人の言を用ふ可らず。仰いで金言を守る可きなり。……（佐殿御書）一三三

○人身は受け難し爪上の土、人身は持ち難し艸の上の露、百二十まで持ちて名を下して死せんよりは、生きて一日なりとも名を擧げん事こそ大切なれ。……（如説修行鈔）二六四

○小乘流布して得益あるべき時もあり。權大乘流布して得益あるべき時も有り、實教流布して佛果を得可き時もあり。然るに正像二千年は小乘權大乘流布の時也。末法の始めの五百年には純圓一實の法華經廣宣流布の時なり。……（崇峻天皇御書）一三八

○世間には人の恐るゝ者は、火災の中と刀劍の影と此の身の死することなる可し。……（如説修行鈔）一九六

……（弟子檀中第二書）一三四

○善言を聞いて惡言と思ひ謗者を指して聖人と謂ひ、正師を疑つて惡侶に擬す、其の迷ひ誠に深く、其罪淺からず。――釋尊說法の內一代五時の間に、先後を立て權實を辨ず。而るに曇鸞、道綽、善導既に權に就いて實を忘れ先に依つて後を捨つ、未佛敎の淵底を探らざる者也。就中法然其の流を酌むと雖其の源を知らず。所以者何。大乘經六百三十七部二千八百八十三卷、幷に一切の諸佛菩薩及び諸の世天等を以つて、捨閉閣抛字を置いて一切衆生の心を薄す。是れ偏へに私曲の詞を展べて全く佛經の說を見ず。妄語の至り惡口の科、言うても比ひ無く責めても餘り有り。人皆其の妄語を信じ、悉く彼の撰擇を貴む。故に淨土の三經を崇めて衆經を抛ち。極樂の一佛を仰いで諸佛を忘る。誠に是れ諸佛諸經の怨敵聖僧衆人の讎敵也。……(立正安國論) 一三―一三

○善につけ惡につけ法華經を捨るは地獄の業なるべし、大願を立てん、日本國の位をゆづらむ法華經をすてゝ觀經等について後生を期せよ、父母の頸を刎ねん念佛申さずば、なんごの種々の大難出來すとも、智者に我義やぶられば用ゐじとなり、其外の大難風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならむ、我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ等と誓ひし願やぶるべからず。……(開目抄) 三

○其の上此の處は人倫を離れたる山中なり。東西南北を去つて里も無し。斯るいと心細き幽谷なれども、敎主釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相傳し、日蓮が肉團の胸中に秘して隱し持てり。されば日蓮が胸の間は諸佛入定の處なり。舌の上は轉法輪の所、喉は誕生の處、口中は正覺の砌なるべし。斯る不思議なる法華經の行者の住處なれば爭か靈山淨土に劣るべき。……(南條兵衛七郎殿御返事) 一九

○抑も因果のことはりは華と果との如し。千里の野の枯たる艸に螢火の如くな

る火を一つ付けぬれば、須臾に一艸二艸十百千萬艸に付き渡りて燃ゆれば十町二十町の艸木一時にやけつきぬ。……（新池殿御消息）八四

○夫れ海邊には木を財とし、山中には塩をたからとす。旱魃には水を財とし、闇中には燈を財とし、男は女人を命とし、王は民を親とし、民は食を天とす。……（上野殿御返事）九

○夫れ攝受折伏と申す法門は水火のごとし。火は水を厭ふ、水は火を惡む。攝受の者は折伏を笑ふ、折伏の者は攝受を悲しむ。無智惡人の國土に充滿の時は攝受を前とす、安樂行品の如し。邪智謗法の者多き時は折伏を前とす常不輕品の如し。譬へば熟の時に寒水をもちひ、寒の時に火を好むが如し。三佛の未來に法華經を弘めて未來の一切の佛子に與へんと思召す御心の中を推するに、父母の一子の大苦に値を見るよりも强盛にこそみねたるを、法然痛はしとも思はで、末法には法華經の門を固く閉ぢて人を入れじと塞き、狂

兒を誑らかして寶を捨てさするやうに法華經を拋させける心こそ無慚に見ゐ候へ。……（開目鈔）一〇七—一〇八

○夫れ小兒に灸治を加ふれば必ず父母を怨む、重病の者に良藥を與ふれば定て口に苦しと憂ふ。……（開目鈔）一六〇

○夫れ水は寒さ積れば氷となる。雲は年を重ねて水精となる。惡は積れば地獄となる。善は積れば佛となる。女人は嫉妬かさなれば毒蛇となる。……（南條殿女房御返事）一九

○夫れ老狐は塚をあとにせず、白龜は毛寶が恩を報ず。……（報恩抄）三二

○夫れ王は民を食とし、民は王を食とす。衣は寒溫をふせぎ、食は身命をたすく。……（四條金吾殿御返事）一五

タ行〔タ、チ、ツ、テ、ト〕

○當世の學者等は畜生の如し。……（弟子檀中第二書）九〇

○當世の躰を覩るに愚にして後生の疑を發す。然れば則ち圓覆を仰いで恨を呑み、方載に俯して慮を深うす。……（立正安國論）二六

○設、德は四海に齊しく、智惠は日月に同じくとも、法華經を誹謗するの師を惡師邪師と知りて、是れに親近すべからざる者なり。……（最蓮房御返事）一七四

○大海の初は一露なり。一を重ぬれば二となり。二を重ぬれば三、乃至十百千萬億阿僧祇の母は唯一なるべし。……（妙密上人御消息）二六

○畜生の心は弱きを威し強きに畏る。……（弟子檀中第二書）八九

○智者と申すは國のあやふきを諫め、人の僻事を申し止るこそ智者にては候なれ。……（賴基陳狀）三三

○忠も又孝の家より出たり。孝と申すは高也。天高けれども孝よりは高からず。又孝とは厚き也。地厚つけれども孝よりは厚からず。……（開目鈔）四八

○濁水に珠を入れぬれば水すみ、月に向まいらせぬれば、人の心あくがる。絵にかける鬼には心なけれども、慓ろし。遊女を絵にかけば我が夫をばこらねども褥まし。錦のしとねに蛇を織れるは服せんとも思はず。身のあつきに溫かなる風猒はし。人の心も此の如し。……（妙法比丘尼御返事）一〇四

○月は妙じけれども秋にあらざれば光を惜しむ。花目出けれども春にあらざれば咲かず。……（妙密上人御消息）一九八

○月は西より出でゝ東に向ひ、日は東より西へ行くこと天然の理り。磁石と鐵と、雷と芭蕉との如し。誰れか此の理を破らん。……（四條金吾殿御返事）四一

○露を、海に預らへ、塵を大地にうづむと思へ。……（上野殿御返事）一

○弟子一佛の子と生れて諸經の王を事ふまつる。何んぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さゞらんや。……（立正安國論）一三六

○傳教大師日本にして末法の始めを記して云はく、代を語れば像の終り末の始め、地を尋ぬれば唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生闘諍の時なり。經に云はく猶多怨嫉況滅度後と此の言良に以有るなりと。此の釋に闘諍の時と云ふは今の自界叛逆西海侵逼の二難を指すなり。此の時地涌千界出現して、本門の釋尊の脇と爲り、一閻浮提第一の本尊を此の國に立つ可し。月支震旦未此の本尊ましまさず。……（本尊抄　三

○天雲れば地暗し、父母謀叛ををこせば妻子亡ぶ、山くづれば草木倒る習なり。……（一谷入道御書）七八

○天台眞言の學者等、念佛、禪の檀那を謾ひ恐るゝこと、大の主に尾を振り、鼠の猫を怨るゝが如し。……（開目鈔）一九

○虎嘯けば大風吹く、龍吟ずれば雲おこる。野蒐のうそぶき、驢馬のいはうるに風吹かず、雲おこることなし。……（上野殿御返事）三四

ナ行〔ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ〕

○濁れる水には月住まず、枯れたる木には鳥なし。……（松野殿女房御返事）一八四

○日蓮が流罪は今生の小苦なれば歎しからず、後生には大樂を得べければ大に悦ばし悦ばし。……（開目鈔）二一〇

○雞の曉に鳴くは用なり。宵に鳴くは物怪なり。權實雜亂の時法華經の御敵を責めず、山林に閉ぢ籠り攝受を修行せんは、豈に法華經修行の時を失ふ

べき物怪にあらずや。……（如說修行鈔）一九六

○日本國の天神地神九十餘代の國主幷に萬民牛馬、生こし生ける生ある者は皆教主釋尊の一子なり。……（妙法比丘尼御返事）三一

○日本國の天神、地神諸王萬民等の、天地、水火、父母、主君、男女、妻子、國主等を辨へ給ふは、皆教主釋尊御教の師なり。……（妙法比丘尼御返事）三一

○女人となる事は物に隨うて物を隨る身なり。夫たのしくば妻も榮ふ可し。夫盜人ならば妻も盜人をる可し。是れ偏に今生の計り事にはあらず、世々生々に影と身と華と果と根と葉との如くにておはするぞかし。……（兄弟鈔）一八八—一九九

○女人よりも男子は禍多く、男子よりも尼の禍は重し、尼よりも僧の失は重し、持戒よりも智者の科重かる可し。……（妙法曼陀羅供養事）二〇五—二〇六

○根深きときは枝葉枯れず、源に水あれば流れ干はかず。火はたきゞ飲くれば絕ねぬ、草木は大地なくて生長することあるべからず。……（華果成就御書）六〇

○根深ければ枝昌へ源遠ければ流れ長しと申して、一切の經は根淺く流れ近く、法華經は根深く源遠し。末代惡世までも盡きず榮べしと天台大師はあそばしたり。……（四條金吾殿御返事）三六九—三七〇

ハ行〔ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ〕

○傍を好んで正を忘れんに善神怒を成さゞらんや。圓を捨てゝ偏を好まんに惡鬼便を得ざらん哉。……（立正安國論）三〇

○鳩化して鷹と爲り、雀變じて蛤と爲る。……（立正安國論）三五五

○火は燒きて照らすを行ゞ爲し、水は垢穢を淨むるを以て行ゞ爲し、風は塵埃を拂ふを以て行ゞ爲し、又人畜草木の爲に魂ゞなるを以て行ゞ爲す。大地は草木を生ずるを以て行ゞ爲す、天は潤すを以て行ゞ爲す。……（生死天事血脈鈔）　六六

○日出でぬれば灯火詮なし、雨ふるに露は何の詮かあるべき。嬰兒に乳より外の物を養ふべきか、良藥に又藥を加ふる事なし。……（上野殿御返事）　一五三

○人有りて世にあらんが爲に國主につかへ奉る程に、させる誤は無けれゞも、我が心のたらぬ上身に怪しき振舞重なるを、猶我身には失ありゞも知らず、又傍輩も不思議ゞも思はざるに、后等の事によりてあやまつ事は無けれゞも、自然に振舞惡しく王なんゞに不思議に見ゆまいらせぬれば謀叛の者よりも、其失重し。此の身に失かゝりぬれば父母兄弟所從なんゞも輕からざる失に行なはるゝ事あり。……（妙法比丘尼御返事）　三五

○人に食を施すに三の功德あり、一には命をつぎ、二には色をまし、三には力を授く。……（妙密上人御消息）　七三

○人に父二人なく、母二人なし。……（賴基陳狀）　四五

○人の心は禽獸に同じく主師親を知らず、何況佛法の邪正、師の善惡は思ひもよらざるなり。……（富木第七書）　三六

○人の心は時に隨つて移り、物の性は境に依つて改る。譬へば猶水中の月の波に動き、陳前の軍の劍に靡くがごとし。汝當座は信ずゞ雖、後定めて永く忘れん。若し先國土を安んじて現當を祈らんゞ欲せば、速に情慮を廻らし念いで對治を加へよ。……（立正安國論）　二五六

○人の身の五尺六尺の神も一尺の面に顯はれ、一尺の面の神も一寸の眼の内におさまり候。……（妙法尼御前御返事）　一〇一

○人の物を敎ふるゞ申すは、車の重ければ油を塗れば轉り、船を水に浮かべて

行き易き樣に教へ候也。……（上野殿御返事）一七六

○人身を受けたる者忠孝を先こすべし。……（開目鈔）四八

○人を怨むこと勿れ。眼あらば經文に我身を合はせよ。……（開目鈔）一四六—一五六

○人路をつくる、路に迷ふ者あり、作る者の罪こなるべしや。良醫藥を病人に與ふ、病人嫌ひて服せずして死せば、良醫の失こなるか。……（撰時鈔）三六

○一人の心なれども二つの心なれば其の心舛ひて成ずることなし。百人千人なれども一つの心なれば必ず一事を成す。……（異體同心事）七〇

○法華經の二處三會の座に在し、日月の諸天は、法華經の行者出來せば磁石の鐵を吸ふごとく、月の水に遷るが如く、須臾に來つて行者に代り佛前の御誓を、果させ給ふ可しとこそ覺ゆ候に、今迄日蓮を訪ひ給はぬは、日蓮法華經の行者にあらざるか、されば重ねて經文を勘へて我身に充てゝ身の失を知る

可し。

○法華經は日月こ蓮華こなり。故に妙法蓮華經こ名づく。日蓮又日月こ蓮華こ……（開目鈔）一五五—一五六

の如くなり。

○法華經を余人の讀み候は口ばかり、言ばかりは讀めども、心は讀まず。心は讀めども身によまず。色心二法共に遊ばされたるこそ貴く候へ。……（四條金吾女房御書）一三

○法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に所尊しこ申すは是れ也。……（土籠御書）二六八

○誘ずる人は大地微塵の如し。信ずる人は爪上の土の如し。……（南條兵衛七郎殿御返事）一七八

○星を見て月に勝れたり、石を見て金に勝れり、東を見て西こ云ひ、天を地こ……（秋元御書）九三

申すもの狂ひを本こして、月こ金は星こ石こには勝れたり、東は東、天は天

なんご有りのまゝに申す者をばあだませ給はゞ、勢の多きに付く可きか、只

もの狂ひの多く集れるなり。……（妙法比丘尼御返事）三八

○螢火が日月を笑ひ、蟻塚が華山を下し、井江が河海を蔑り、烏鵲が鸞鳳を笑ふなるべし。……（佐渡御書）一四一

○時鳥は春を送り、雞鳥は曉を待つ。……（撰時抄）一九二

○讃められぬれば、我が身の損ずるをも顧みず、毀られぬる時は又我が身の傷るをも知らずふるまふ事、凡夫の事なり。……（諸法實相鈔）八七

○塹堤漏らざれば水失る事なし、信心の心全ければ平等大慧の智水乾く事なし。……（秋元御書）三四七

○凡夫の習ひ身の上ははからひがたし、是れ能々知を賢人聖人とは申すなり。……（四條金吾殿御返事）三三

マ行〔マ、ミ、ム、メ、モ〕

○曲れる木は直なる繩をにくみ、僞れる者は正しき政をば心に合はず思ふなり。……（新池殿御消息）二〇三

○松榮ゆれば柏悅び、芝枯るれば蘭泣く、情無き草木すら此の如し、何況情あらんをや、又父子の契をや。……（法蓮抄）六六

○源濁りぬれば流清からず、天曇れば地暗し。……（種々物御消息）六四

○源濁りぬれば流れ淨からず、身曲りぬれば影直からず。……（一谷入道御書）七七

○物種と申物一なれども、植ゑぬれば多くなり、龍は小水を多雨となし、人は小火を大火となす。……（御衣並單衣御書）九九

ヤ行〔ヤ、イ、ユ、エ、ヨ〕

イ、エ、はア行に出せり。

○闇なれども燈入りぬれば明か也。濁水にも月入りぬれば澄めり、明かなる事日月にすぎんや。……（四條金吾女房御書）一三

○瑜伽論に云はく東方に小國あり、其の中に唯大乘の種姓のみありと、大乘種姓とは法華經也、法華經を下種して成佛すべしと云ふ事なり、所謂南無妙法蓮華經なり、小國とは日本國なり。……（目白記）三

○弓弱ければ絃弛るし、風ゆるければ波小さきは自然の道理なり。……（四條金吾殿女房御返事）二八

○世には賢き人は少く愚なき者は多し。牛馬の父を知らず、兎羊の母を辨へざるが如し。……（九郎太郎殿御返事）三三

○悅ばしい哉、汝蘭室の友に交つて麻畝の性と成る。誠に其の難を顧み專ら此の言を信せば風和ぎ浪靜にして不日に豐年ならん耳。……（立正安國論）三五

ラ行〔ラ、リ、ル、レ、ロ〕

○良藥に毒を交ふる事有るべきや。潮の中より河の水を取出す事ありや。月は夜に出で、日は晝出で給ふ、此の事諍ふべき乎。……（四條金吾殿御返事）四

○龍女が成佛此れ一人にはあらず。一切の女人の成佛をあらはす。……（開目鈔）三七一

ワ行〔ワ、井、ウ、ヱ、ヲ〕ウはア行に出せり

○我が父母を人の殺すに父母に告げざるべしや、惡子醉狂して父母を殺すを制せざるべしや、惡人寺塔に火を放んに制せざるべしや。一子の重病を灸せざるべしや。……（開目鈔）二〇七

●御遺訓索引

○我等が本師釋迦如來、初成道の始めより法華を說かんと思し召しかごも、衆生の機根未熟なりしかば、先づ權敎たる方便を四十餘年の間說き、後に眞實たる法華經を說き給ひし也。……（如說修行鈔）二六五

○敎の淺深を知らざれば理の淺深辨る者なし。……（開目鈔）二五三

項目索引〔數字は本文頁數〕

■印を附せるものは御遺文名目なりと知るべし

ア

阿含（一經）……一二六、一三一、二四一、二七五、二七六
阿僧祇……二六
■阿佛房尼御前返事……二〇七
■秋元御書……九四、一二一、二七愛にありては二元と一元とは一つのものとなる。愛は全時に一であり二である。（タゴール）……二七三
過は改むるに憚るなかれ（孔子）……二〇八
アリストテレース……一六四

イ、井

長敬……一五九
易行道……三一いくたびかのりの時雨にあひながら染むるに難きわが心かな……二四七
異體同心……七〇
■異體同心事……五四、七〇
一元哲學……二七
一切衆生の恩……二四
一切の行は信を以て首と爲す、衆德の根本也（梵網經）……二七
一身即三身……二二、二六六
■一谷入道御書……七七、二四〇
イブセン（ヘンリック）……六〇、六二、一八九、二一八
因果應報……八四
井上甫水……七七

ウ、ヴ

宇宙……一

■上野殿御返事…一、一〇、一五、一六、一七、一六、三四、二四二
「海の女」……六一
ヴェルアラン……六二
■孟蘭盆御書……五二

エ、エ

依法……二五八
英國俚諺……一八二
永遠の沈默……六一
圓滿……一七八

オ、ヲ

應用……九六
應身……二二
大隈重信……四一
親の愛……一六七
凡そ何事にありても、汝をして憎惡せしめ、猜疑せしめ或は詛はしむるが如き、若くは汝をして光明を忌ましめ、壁又は幕を要せしめ、世人の頭を正視する能はざるが如き行爲に傾向せしむることは斷じて汝の利益と思ふ勿れ。（マーカス、アウレリアス）……二二一
恩……二二一

カ

■開目鈔……四六、一〇七、一四六、一五六、一六〇、二五一、二七一、二七五
孝……四五
香川景樹……二六
覺悟、快心……一二八
覺醒……一一六
簡易生活……一五八
カント……一二四、一七六、二一五、二一六
カーネーギ……一二九

キ、ギ

機會……一九八
■義淨房御書……一一五
救濟……七二
教育……一七六
教理……二五二
境遇……六
■兄弟鈔……一八二
協同……六八
希臘俚諺……一八二
■御衣並單衣御書……九九
毀譽褒貶……八七

ク

熊澤蕃山……二二〇
果斷……一四一
■華果成就御書……六〇
■九郎太郎殿御返事……二二二
黑住宗忠……一二六
君子小人……二二二
君臣……一五

ケ、ゲ

華嚴（一經）……一一六、一二一、二四二、二七五、二七六
外道と法華經……二七五
解脫……一一五
ゲーテ……二五〇、二五二
ケプレル……二二六
健康……一八二
健康は富に優れり健康は幸福也（英國俚諺）……一八二
健康と智惠とは人の二大幸福なり（希

臈俚諺）……一八二
賢愚……二三〇
「建築師」（イプセン）……六一
見生……一三
堅忍不拔……一四四
現代は明に心靈の活動を目撃し得る、
心靈の出では急迫し威赫して突進しつゝある。恰も寸時の餘裕もなく、命令を遵奉せよと命ずるが樣に……（マーテルリンク）……六一
原因結果……八二

コ、ゴ

弘法大師……二五二
孔子……二〇八、二五〇、二五一
公義……四一
公明正大……一三二
光明……二三五
五箇條の御誓文……四一、一四一
國主の恩……二四二、二四四
心……九九
心の鍛錬……一五一
心から生れる人こそ賢けれ、死ぬる人こそあほうなりけれ（黑住宗忠）……一三八
後醍醐天皇……一八
事たれば足るにも慣れて何くれと足るがなかにも猶なげくかな（松平定信）……一五三
刻苦……一四九
これはしも今やあるとよく見ればあらぬ獸の人の皮着る（平田篤胤）……二〇三
權教……一九六
權大乘經……一九六
今日の德……六〇

サ、ザ

■最蓮房御返事……一七四
再生……一三
罪科……二〇六
像法……一六一
曹洞禪……一三六
■佐渡御書……八二、一三二、一四一
三寶の恩……二四二、二四六
三身即一身……二一二、二六二
三論……一三六、二五二
懺悔……二〇七

シ、ジ

四恩四德……二四二
■四條金吾殿御返事……四、一三、一五、一七、一九、二一三、二七〇
■四條金吾殿女房御返事……二九
■四條金吾釋迦佛供養事……二〇一
自我主義（イゴイズム）……一〇
自覺自信……一三二
自覺と努力……一二八
自己觀照……一三〇
自信……一三五
自然……四
自然淘汰……八九
自制……一四六
時節……一九五
實教……一九六、二五五
實用主義……二一三
「社會の柱」……六〇
捨閉閣抛……一三二
釋尊……二一、及各頁
淨土門。淨土宗……三一、三二、一三六

浄土三部經……三二
■生死一大事血脈鈔……六六、二二〇
■諸法實相鈔……八七
執着……二〇三
■種々物御消息……六四
修行……二六四
純圓一實……一九六
ジョン、フラスター……八五
眞言宗……一三五、二五二
眞言亡國……一四八
信仰……二四九
信仰は一切の智識の終極なり、端緒に
はあらず(ゲーテ)……二五〇
信心信仰……二四七
信義……四三
進化論……八九
人格……七五
人生……六四
仁政……一七

ス

凡て快樂は苦痛といふ代價を出して買はざるを得ず、而して虚僞の快樂と眞正の快樂との受る違は、一は苦痛といふ代價を快樂以後に支拂ひ、一は苦痛といふ代價を快樂以前に支拂ふなり。

(ジョン、フラスター)……八五

スミス、ロバルトソン……二二六
■崇峻天皇御書……二六、一五一、一九九

セ、ゼ

正義……三八
正邪……三〇
性善……一〇七

清淨……一八四
聖賢……二二三
聖道門……三一
聖德太子……四四、二七〇
昭憲皇太后……一三、一七
小乘經……一九六
セエグスピーア(ウ井リアム)……一九八
ゼエムス(ウ井リアム)……二四、二一三
世態……八〇
世智辨……二五四
雪山……二五八
雪山童子……二五八—二六三
錢金はつかひ捨てるもたわけもの喰は
すにためる人も馬鹿もの……九六
撰擇集……三一、一三一
選師選友……一七四
■撰時鈔……一九二、二一六
先哲……二一六
■千日尼御返事……一六四、一七一
善……五四
善惡……五二
善惡の報は影の形に從ふがやうである。
過去、現在、未來の三世に因果は環り
環つて居る。何んとも思はず、空しく
この世を過せば後悔するばかりである。
(涅槃經)……八五
禪天魔……一四八

ソ、ゾ

ソクラテス……一七四
ゾラ……六二

タ、ダ

大學……一六

大悟……一九
大乘經……一四六
體得……二六八
道德的習慣である正義は人の生命、利益の侵害を制し他人が此れを行ふとするのを防ぐ意志及び行爲の習慣である。それは人の生命及び利益を自分のものと同じやうに見て、これを尊敬することから起つたのだ。凡そ人の利益といふものは身體、生活、家族(自分の生活を擴大する)、資産(行動の方法を司る)名譽(自分を理想的に存在せしめる)自由(自分の目的を徹すことの)にあるのだ。(パウルセン)……二八
道元禪師……一三六
道善密師……一三五
道理……二九
道理と君主……一九
ダーウヰン……八九
高山樗牛……二六七
高き屋にのぼりて見れば煙たつ民のかまどは賑ひにけり(仁德天皇)……一八
タゴール……五一、二七五
民草のうへないかにと思ふ夜の袖にも露のこぼれけるかな(昭憲皇太后)……一七

チ

直覺……二四九、二四九
智度論……二六、一七
知足……一五三
忠とは其心を一にするの謂也。國の本たるは忠に在り。忠は能く君臣を固くして社稷を安んじ、天地に感じ神明を動かす。(馬融)……一五

忠孝……四九
忠告諫言……一六〇
忠實……三六
中庸……二六八

ツ

■士籠御書……二六八
常に恐怖するよりも寧ろ危險に向ふを可とす。(英國俚諺)……一四五

テ

貞操……一八二
徹悟……一三
撤底……一三四
弟子檀中第二書……八九、一三四、一三六
天の與ふる機會に乘ぜよ、見逃す可らず。(セエクスピーア)……一九八
天の命をこれ性と謂ひ、性に率ふをこれ道と謂ひ、君を修むるをこれ教といふ。(中庸)……二八
天台宗……一三六
天台大師……一六二、二二三
天地ありて萬物あり、萬物ありて後に男女あり、男女ありて然る後に夫婦あり。然る後に父子あり君臣あり。(易經)……一七一
天分天職……六六
傳教大師……二三、一六二

ト

時……一四二
德は本なり、財は末なり、本を外にして末を內にすれば民を爭はしめ奪ふことを施す。(大學)……一六

訪ふ人もなき山かげの櫻ばなひとり咲
いてやひとり散るらん。（香川景樹）…三六
■富木殿御七書……二三八
トルストイ……四九、五〇、二二八、二二九
曇鸞法師……三一、一三一

ナ

中江藤樹……八七、一四五
何事も養ひたてよ秋の田の稻葉ももと
は植えし早苗を。（松平定信）……一七六
■南條殿御返事……四三
■南條兵衛七郎殿御返事……一七六
■南條殿女房御返事……九一
雛行道……三一

ニ

■新池殿御消息……八四、一〇三

ニイチェ……四九、五〇、二二八、二二九
日本國體……三
二宮尊德……一三
ニュートン……二三八
■如說修行鈔……一九五、二六四
女人成佛……二七一
「人形の家」（イブセン）……六〇、一九九、二二八
仁德天皇……一八

子

然阿上人良善……一三五
願なく又恐れなき心あらば、虎さへ爪
をおくところなし。（中江藤樹）……一四五
涅槃經……一三一、二四一、二六四、二七五、二七六
念佛無間……一四八

ハ、バ、パ

パウルゼン……三八
■報恩鈔……二三一
報身……二一二
方等……一二七、一三一、二四一、二七五、二七六
北條氏（北條時賴）……
……三一、一〇八、一一六、一一八、一三四、一六〇
パスカル……七六
馬融……一五
腹のたつ人に見せばや池の鴛鴦……一七一
般若（一經）……一二七、一三一、二四一、二七五、二七六
反省……一五六

ヒ

■日向記……二三
人は萬のものゝ中で最も脆弱なもので
宛も蘆葦のやうなものである。併し、
人は克く考へる蘆葦である。自然は人

を殺すときには、武器を持たないで、
一片の蒸氣、一滴の水で殺して了ふ。
併し、假令、自然が人を斯く容易く殺
すとも、人は自然より偉大である。何
んとなれば人は自然の爲に自分が死ぬ
ことを知つて居ても、自然が人に優れ
る點は、自然は少しも知らぬからであ
る。（パスカル）……七六
人の心……一二
人の己れを譽むるを聞きては、實に過
ぐる小事たりとも悅び誇り、己れを謗
れるを聞きては、有ることなれば怨み
無きことなれば怒る。過を飾り非を遂
げて改むることを知らず。人皆其人品
を知り、其人の邪を知れども、己れ獨
り克く隱して知られずと思へり。欲す
る所を必として諫を防ぎて入れず。（中

江藤樹）……八七
人は人によりてのみ人となることが出來る。人より教育の結果を除り去れば全く無となる計りだ（カント）……一七六
平田篤胤……二〇三
品位……七七

フ、ブ

夫婦……一七一
藤原鎌足……四三
佛陀はランプに向つて「汝の油を捨てよ」と命じた。ランプは燈火をかゝげん爲に、自分の目的を果さんが爲に油を犧牲とする。そこにランプの解決がある。愛の擴充がある。犧牲が犧牲として止まり、苦痛として止まる間はその犧牲は眞實のものではない。犧牲が愛によりて溢れ出づる時に犧牲は私達にとりて歡喜となる。「我れ愛するが故に」犧牲するの犧牲でなければならぬ。佛陀の自己拋棄の眞の意味はこゝにある。愛は絶對である。「我れ愛す」といふ時に、そこには何の理由もない。たゞ愛するが故に自己を捧げるのである。愛による犧牲は苦痛や努力の感じがなくて、たゞ歡喜と讃美とを持つて居る。利己心より生れて來る犧牲は常に努力と苦痛とを持つて居る（タゴール）五一、五二
父母の恩……二四三、二四四
踏まれても根づよく忍べ道芝の、やがて花咲く春は來ぬ可し……一六七
ぶん〳〵と障子にあぶのとぶみれば明るき方へ迷ふなりけり。（二宮尊德）……一三

ヘ、ベ

平和……一〇
■兵衛志御返事……六、四一
ヘーゲル……一二四
ベルグソン（アンリー）……七、一二四、二一三、二一九
■辨殿尼御前御書……一四四

ホ、ボ

法華—法華經……二七〇、二七五及各頁
法華經義疏……二七〇
法華玄義……二七〇
法華文句……二七〇
法性身……二一二
法然上人……三一、一三一
法相……一三六、二五三
■法蓮抄……六八
佛と宇宙……二二四
佛の恩……二四〇
■本尊鈔……二四
凡夫……八九
凡夫と慾……二三八
梵網經……二七

マ

摩河止觀……二七〇
マーカス、アウレリアス……三三
マーテルリンク……六一、六二
孟子……二五〇
信は是れ義の本なり、事毎に信あるべし。其れ善惡成敗は必ず信にあり。君臣共に信あるときは何事も成らざらん。君臣、信なければ萬事悉く敗る。（聖德太子）……四四

松平定信……一五二、一七六
■松野殿御返事……九六、二五八
■松野殿女房御返事……一八四
末法……一六二
眞の親……一六四
眞心……一〇一

ミ、ム

道……二六
無量義經……二四〇
室鳩巣……四五、四六

メ、モ

目に見えぬ神の心に通ふこそ、人のこゝろの誠なりけり。（明治天皇）……九九
明治天皇……一二、四一、四二、四四、九九
■妙法尼御前御返事……一〇一、二五五
■妙法比丘尼御返事……一五、一〇五、二一一
■妙法曼陀羅供養事……二〇六
■妙密上人御消息……
……二六、七二、八〇、一二二、一九九、一九八、二九九
文字しらぬ身にも心に德あれば、暗夜も晝の心地こそすれ。（井上甫水）……七七
モーパッサン……六二
貰ばすにちぎれば柿の澁きかな……八二

ヤ、ユ、ヨ

耶蘇……二五〇、二五一

山水の其源を清めてぞ千々の流も濁らざりけり。（藤原親衣）……二一八

瑜伽論……二五二

世治り民安かれといのるこそわが身につきぬおもひなりけり。（後醍醐天皇）……一八

四方の海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらん（明治天皇）……二二
四方の海皆はらからとむつみなば世に波風は立たじと思ふ（昭憲皇太后）……二二
■賴基陳狀……二五、四六

リ、ル、レ

理解……九四
理想境……一二五
理性……九一
律國賊……一四八
リットン卿……一八五
■立正安國論……
……三〇、一二六、一二七、一三〇、一三五、一六〇、二四〇、二五九、二七七
立憲政治……四二
六方禮經……一七一
龍樹菩薩……一七七
龍女……二四五、二七二、二七五、二七四
臨濟禪……一三六
流轉……七
禮を以て本と爲せ。其れ民を治むるの本は必ず禮にあり、上に禮なきときは下齊はず。下に禮なければ以て必ず罪あり。是を以て君臣禮あれば位の次亂れず、百姓禮あれば國家自ら治まる。（聖德太子）……四四

ワ

往生論……三一
惑世……二〇一
和氣清麿……四三
我世人に勸む父母に孝に。詩（室鳩巣）……四六
「吾等目醒の頃」……六一

大正五年四月十四日印刷
大正五年四月十九日發行

【定價金五拾五錢】

著作者　日蓮遺訓研究會

發行者　大阪市東區北久寶寺町四丁目十五番地ノ一　岡田菊二郎

印刷者　大阪市西區阿波座二番町一番地　堀越幸

不許複製

發賣所　大阪市東區北久寶寺町心齋橋西へ入　岡田文祥堂
電話東三二九八番
振替口座五二二八番

70
362

終